

令和6年度

農業試験場

業務年報

令和7年3月

# 福井県農業試験場

## 令和6年度業務年報目次

### 1. 研究成果

(1) 実用化技術	1
(2) 登録品種・特許等	1
1) 品種登録・特許等出願の状況	1
2) 保有する登録品種・特許等知的財産一覧	1

### 2. 研究の概要

#### I 戦略的研究開発事業

(1) 安定良食味な水稲早生品種の開発	2
(2) 病気に強く省力生産できるミディトマト新品種の育成	2

#### II 地域科学技術振興研究事業（地域産業・技術振興課）

(1) 中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立	2
(2) ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立	2
(3) 一年中おいしい‘越のルビー’を生産する低段密植栽培技術の開発	3
(4) 夏季の異常気象に対応できる白ネギ生産技術の確立	4
(5) 小ギク生産拡大に向けた省力生産技術の確立	4
(6) 8月出荷で高収益化！ブドウの早期収穫技術の開発	5
(7) 甘い！大きい！福井オリジナルイチゴ新品種開発と多収技術確立	5
(8) 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立	5
(9) 水稲の高温登熟耐性に関する育種素材の育成と新規選抜技術の確立	6

#### III 現場移転促進（フォローアップ）を図る開発技術（R6）

(1) 越前スイセンの球根養成における省力化栽培技術の確立	6
-------------------------------	---

#### IV 予備試験 (R6)

(1) コシヒカリの高温耐性栽培技術の開発	7
(2) 収穫後半でも高品質なイチゴ新品種の育成	7
(3) 福井県産ミディトマトを支える新品種の育成	7
(4) 大規模施設園芸ミディトマトにおける超多収・安定生産技術の開発	7

#### V 電化協会委託試験 (R6)

(1) ミディトマト‘華小町’挿し穂の冷蔵貯蔵法の開発	7
-----------------------------	---

#### VI その他事業 (R6)

(1) 病害虫発生予察事業(国・県)	8
1) 水稻病害虫	8
2) 大麦・大豆・ソバの病害虫	9
3) 野菜・果樹・花卉の病害虫	9
(2) 病害虫防除所運営事業(国庫)	10
(3) 農薬抵抗性検定事業(国・県)	10
1) ナシ黒星病の耐性菌検定	10
2) コナガの薬剤感受性検定	10
3) ダイズ紫斑病の耐性菌検定(県)	11
(4) 減農薬防除体系実証事業(国・県)	11
(5) 重要病害虫等侵入警戒調査事業(国・県)	11
1) コドリングア	11
2) トマトキバガ	11
3) 火傷病	11
4) スイカ果実汚斑細菌病	11
5) ウメ輪紋ウイルス	12
6) 水稻各病害	12
7) キウイフルーツかいよう病	12
(6) 土壌保全対策費(土壌環境基礎調査事業)	12
(7) 肥料検査登録事業	12
(8) 奨励品種決定調査事業	12
1) 水稻	12
2) 麦類	13
3) 大豆	13
(9) 原原種・原種ほ設置事業	13
(10) 優良種子生産体制確立	13
(11) 水稻生育指標調査	13
(12) 主要農作物優良品種育成事業(県)	14
(13) 農地土壌の炭素貯留能力を向上させるバイオ炭資材等の開発(国庫)	14
(14) 農業分野での衛星データ利用活用手法の確立	15

1) 米の食味推定	-----	15
2) 麦の収穫時期予測	-----	15

### 3. 普及指導業務実績

(1) 農業経営発展支援	-----	15
1) リーディングファームの育成	-----	15
2) 関係組織連携による経営体の発展支援	-----	16
3) 集落営農救援隊による集落営農組織の経営支援	-----	16
4) 女性活躍支援	-----	16
(2) いちほまれ栽培技術の確立と普及	-----	16
1) 栽培マニュアルに基づく生産指導	-----	16
2) 令和7年度に向けたマニュアルの修正	-----	17
(3) 園芸タウンの推進	-----	17
1) データ駆動型農業の実践体制づくり	-----	17
2) 新品種導入によるミディトマトの産地拡大	-----	17
(4) ウメおよびブドウの園芸タウン整備による産地振興	-----	17
1) ウメ園芸タウンの整備による産地再生	-----	17
2) ブドウ園芸タウンの整備による生産化	-----	18
(5) 畜産経営支援	-----	18
1) 地域内での自給飼料生産拡大に向けた支援	-----	18
2) 酪農・肉牛肥育経営への支援	-----	18
3) 鳥インフルエンザ防疫対応<普及計画に記載無し>	-----	19
4) 今後の方向と課題	-----	19
(6) 農業経営発展支援	-----	19
1) 外部評価検討会の実施	-----	19
2) 普及指導計画や調査研究への助言	-----	19
3) 普及指導員の資質向上	-----	19
4) 技術解決チーム会の開催	-----	20
5) 全国会議等への出席による情報収集	-----	20

### 4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) 高校・大学受入授業	-----	20
(2) プレスリリース実績	-----	20
(3) 講演会・出前講座	-----	21
(4) 園芸 LABO の丘による園芸教室と体験講座	-----	22
(5) YouTube での動画コンテンツや SNS(X(旧 Twitter)、LINE)等での情報発信	-----	27

<b>5. 農業者等の視察対応</b>	27
---------------------	----

## **6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等**

(1) 論文	28
(2) 著書	28
(3) 学会等講演発表	28
(4) 雑誌	29
(5) 広報	29

1) 日本農業新聞 アグリトゥモロウ学会等講演発表

2) 福井県植物防疫協会 ふくい植防だより学会等講演発表

(6) その他(発行物等)	29
---------------	----

## **7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞**

(1) 客員教授の招聘	30
-------------	----

## **8. 一般報告**

(1) 施設	31
(2) 予算	31
(3) 組織と職員数	33
(4) 人事	34
(5) 主な備品等(令和4年度、50万円以上)	35

# 1. 研究成果

## (1) 実用化技術

No.	技 術 名	内 容
1	安価な簡単棚を利用したキウイフルーツ栽培	単管パイプとクランプを使用した自主施工も可能な管理棚を利用することで、棚資材費を約47%削減できる。また、簡易棚を生かした密植栽培を行うことで、植栽5年目で収量2.0t/10aを達成できる。

## (2) 登録品種・特許等

### 1) 品種登録・特許等出願の状況

#### 1. 品種登録出願

特許等出願はない。

### 2) 保有する登録品種・特許等知的財産一覧

#### 1. 品種の登録

品 種 名	植物の種類	品種登録年月日	登録番号
福太夫	うめ種	平成17年3月23日	12985
オータムヴィオレミニ	らっきょう種×きいいとらっきょう種	平成19年3月2日	14993
イクヒカリ	稲種	平成19年3月15日	14999
ニューヒカリ	稲種	平成21年7月31日	18349
まんぷくもち	稲種	平成22年2月19日	19053
あきさかり	稲種	平成23年3月2日	20431
いちほまれ	稲種	令和2年12月9日	28234
さかほまれ	稲種	令和5年1月18日	29497

#### 2. 品種の登録出願中

品 種 名	植物の種類	品種登録出願年月日	出願番号
福井1826号	トマト種	令和2年4月2日	34622
越南300号	稲種	令和2年4月2日	34623
福井1832号	トマト種	令和2年4月2日	34624
シャインパール	稲種	令和4年4月4日	36206
新福1号	稲種	令和4年9月13日	36440
福井GR1号	ブドウ	令和7年3月 日	

#### 3. 特許の取得

発明の名称	特許登録年月日	特許登録番号
電子レンジとポリエチレン袋を用いた低コスト植物無菌培養方法	平成19年9月14日	4009685

## 2. 研究の概要

### I 戦略的研究開発事業

#### (1) 安定良食味な水稻早生品種の開発 (H30~R6)

品種開発研究部 水稻育種研究G 中岡史裕

昨年度選抜した2系統を圃場での生産力検定試験および各種特性検定試験（高温登熟性、いもち病真性抵抗性遺伝子型、葉いもち圃場抵抗性、穂いもち圃場抵抗性、穂発芽性、耐冷性、胴割れ耐性、白葉枯病抵抗性）、食味官能試験に供試した。作物研究Gおよび奨決現地試験のデータも参考にして有望な1系統を選抜した。2系統および対照品種「ハナエチゼン」、「ひとめぼれ」および「つきあかり」について、品種登録出願に必要な形質データを取得した。また、栽培マニュアル案を作成した。

#### (2) 病気に強く省力生産できるミディトマト新品種の育成 (R2~R6)

品種開発研究部 園芸育種研究G 阿部洗己

葉かび病抵抗性遺伝子を導入した品種については、場内で選抜した系統の土耕栽培試験を行った。現地試験を土耕栽培で4ヶ所実施した。

単為結果性遺伝子を導入した品種については、F1系統の親を固定するため、戻し交雑を行い、世代を進めた。W2939由来系統については、4系統の親の固定が完了した。また、固定完了した親系統を用いてF1種子を作成した。pat-2由来系統から6種類、W2939系統から6種類のF1種子を作成した。

### II 地域科学技術振興研究事業（地域産業・技術振興課）

#### (1) 中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立 (R5~R8)

園芸研究センター 野菜・花き研究G 榊田恭恵

小型パイプハウスを活用した省力園芸体系の確立を図るため、昨年、簡易養液栽培システムの設計・開発、効率よく簡易養液栽培システムを活用できる小型パイプハウスの設計を行った。今年度は、「簡易養液栽培システム」で栽培試験を行い、品目、作型の検討を行うとともに、天井部のフィルムを開閉できるフルオープン型を導入した小型パイプハウスの内部環境について調査した。

ミニトマトの5月定植では、「CFネネ」が有望であると考えられた。小玉スイカにおいては、簡易養液栽培システムでも栽培できる可能性が示唆された。雑メロンでは、2回収穫での栽培が適していると考えられた。

作型の組み合わせでは、2作目のミニトマトの収量が少なく、小玉傾向になった。定植時から培地温、水温が生育適温の25℃以上を超えていたことが原因と考えられた。

天井フィルムを開閉してもハウス内の温度上昇抑制効果が漠然としなかった。測定位置を変更し再度調査する。

#### (2) ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立 (R5~R10)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 野崎直・野尻智洋

作業性に優れた省力ネット収穫技術を開発するため、ネットの高位置設置や新たなネット素材を検討設置して、作業性、果実品質に及ぼす影響について調査した。設置・集荷において高位置区が軽労となった。メッシュシートが最もアカマダラケシキス

イの被害が少なく軽劣であった。高位置にネット等を設置することで地面敷設に比較してケシキスイ被害を抑制できることが証明できたが被害は0ではなかった。

収量性に優れた樹形改造手法を開発するため、樹形と予備枝の管理を変えた違いがウメの生育、収量、果実品質に及ぼす影響について調査した。収量、収穫果数は慣行の開心自然形・予備枝 90cm 区が最も多かった。1果重は高位置2本主枝・予備枝 15cm 区が最も大きかった。高位置2本主枝への樹形改造の減収影響は慣行比 75%以内を目標としたが 73%となった。

灌水がウメの生育に与える影響について露地試験とポット試験で調査した。露地試験では、4月～収穫の期間はテンシオメーターの計測した pF 値が 2.0 以下の日、収穫～9月の期間はテンシオメーターの計測した pF 値が 2.5 以下の日に灌水を実施した。灌水区では落葉期の葉中窒素含有率の減少が遅れ、その後の枝中のアミノ酸含量の推移にも試験区間に違いが生じた。ポット試験では、4月～9月の期間に灌水を開始する pF 値を 1.5, 2.5, 2.8 の3段階に変え、各試験区の生育を調査した。湿潤に管理した試験区ほど、幹周の生育が優れ、新梢長、新梢本数が大きいという結果が得られた。また、果実生育に関しても、湿潤に管理した区ほど、1果重、横径が大きく、収量も多かった。

### (3) 一年中おいしい‘越のルビー’を生産する低段密植栽培技術の開発 (R3～R6)

園芸研究センター スマート園芸研究G 山形惇平 藤田雄大 坂本浩

低段密植栽培において周年安定して糖度 8° 以上の果実を生産する技術を確認するため、NSP 栽培装置（自然給水型、ヤンマーグリーンシステム）およびうるおい力持ち（植物重量モニタリング給液型、山本電機）を用いて、収量および品質を調査した。全ての調査において‘華小町’を供試した。

R5年12月定植作型の結果を踏まえると、R5年度の年間の糖度 8° 以上の果実収量は、1果重が 11g 以上の場合は、いずれの栽培装置を用いても 7.0t/10a であった。1果重が 20g 以上の場合は、NSP では 2.2t/10a、うるおい力持ちでは 3.6t/10a であった。

本年度における NSP を用いた栽培では、養液 EC と栽植密度の違いが収量および品質に及ぼす影響を調査した。5月定植分においては、養液 EC (dS/m) : 1.3, 1.5, 栽植密度 (株/10a) : 8,500, 6,000 の計4区で比較した。その結果、糖度 8° 以上の果実を最も多く収穫できたのは、養液 EC1.5dS/m、栽植密度 6,000 株の場合であり、0.7t/10a であった。9月定植分においても、5月定植分と同様の試験区で比較した。その結果、糖度 8° 以上の果実を最も多く収穫できたのは、養液 EC1.5dS/m、栽植密度 8,500 株/10a の場合であり、0.7t/10a であった。

うるおい力持ちを用いた栽培では、給液タイミングと栽植密度の違いが収量および品質に及ぼす影響を調査した。5月定植分においては、給液タイミング (%) : 95, 90, 栽植密度 (株/10a) ; 8,300, 10,000 の計4区で比較した。その結果、糖度 8° 以上の果実収量が最も多くなったのは、給液タイミング 90%、栽植密度 8,300 株/10a の場合であり、0.5/10a であった。10月定植分においても、5月定植分と同様の試験区で比較した。その結果、糖度 8° 以上の果実を最も多く収穫できたのは、給液タイミング 90%、栽植密度 8,300 株/10a の場合であり、0.9t/10a であった。

いずれの栽培装置においても、3月定植作型で試験を行い、その結果を受けて、6月以降に実用化技術もしくは指導活用技術作成を検討する。

10月より、(株)無限大にて低段密植栽培の委託実証を行い、低段密植栽培を行う上での課題について随時聞き取りを行った。得られた意見を実用化技術もしくは指導活用技術作成の参考にする。

‘華小町’以外の品種での閉鎖型育苗施設での育苗と、ヤンマー方式での定植後の生育および糖度と収量を検討した。育苗終了後の苗質は、‘エコスマイル’は茎径、葉長が大きく、草丈 7.7 cm と、閉鎖型苗生産施設下でも徒長しにくかった。

生育調査では、6月6日まで品種間差が明らかでなかったが、6月18日調査で、‘エコスマイル’の草丈が 127.0 cm と低く、茎径 7.4 mm と太かった。第一果房高さも‘エコスマイル’が 58.3 cm と低く、低段密植栽培との相性が良かった。次いで‘エコスイート’が 65.5 cm であった。

株当たり収量は‘エコスマイル’が 612.0g と多かった。果数 33.2 個、一果重は 18.3g であった。糖度は、‘ドルチェイエ

ロー’、‘CF ネネ’が10.7度、10.5度と高かった。

‘華小町’挿し穂の採穂部位が生育と収量に及ぼす影響は、花房2～4段付近から採穂した腋芽の生育が優れた。収穫についても同様な傾向がみられた。供試株数が少ないため、再試験が必要である。

#### (4) 夏季の異常気象に対応できる白ネギ生産技術の確立 (R4～R6)

園芸研究センター 野菜・花き研究G 澤崎光希 清水美櫻

昨年までの結果から、灌水により夏期の生育停滞を回避し収量が向上する可能性が示唆された。一方、灌水により細菌性病害が増加し、肥大が良好なほど発病率が高くなる傾向がみられた。また、特に9月収穫で発病が多い傾向がみられた。栽植密度は葉鞘部の肥大に影響し、密度を上げることで肥大量を調整できるため、今年度は栽植密度(播種粒数:2粒、2.5粒、3粒)と灌水処理(灌水、無灌水)を組み合わせる栽培試験を行い、生育、収量、収穫調査時の腐敗株(病害により調整不可なもの+褐色腐敗病斑のあるもの)率を調査した。定植後からの灌水(4/2定植、4/12～8/28灌水)により、5月中旬以降の葉鞘径、全長、生葉数が無灌水区よりも上回る傾向にあった。栽植密度が同じ場合、灌水区は無灌水区と比較して収穫時の葉鞘径および調整重が増加し、可販収量においてはM規格以下が減少し、L規格以上が増加した。また、栽植密度を上げることで腐敗株率が低下する傾向があった。目標とする収穫時期の発病リスクに応じて栽植密度を調整することで、灌水による生育停滞回避・増収効果を最大限生かすことができる可能性がある。ただし、この試験に関しては単年度の結果であり、今後、県内主要2品種について効果の確認を行う予定である。

乗用防除機に取り付け、局所灌水可能な灌水ノズルを開発した。吐出圧と耐久性については改良の余地があるため、噴出口形状の検討を行う予定である。

白ネギのネダニ類に対する薬剤施用の効果について試験を行った。白ネギに寄生するネダニ類が多いほど生育が抑制される結果となった。

#### (5) 小ギク生産拡大に向けた省力生産技術の確立 (R6～R8)

園芸研究センター 野菜・花き研究G 山本浩平

小ギクの生産において、栽培管理、防除、収穫の3つの観点から省力技術を検討している。

栽培管理では、県内栽培品種を含む9品種において定植前摘心を実施した。開花時期や切り花調査を行い、慣行と同等の開花時期・切り花長を得られる摘心位置を明らかにした。しかしながら、今年度は全体的に草丈が短く、出荷品質である85cm未満となった。また、慣行と比較した作業性を十分に検討できなかった。次年度は、定植前摘心によって出荷品質の切り花が得られるかと効率的な作業方法を調査していく必要がある。

防除では、小型多機能型ロボット(株式会社DONKEY製:試験モデルXCP100)を利用して、防除時間や心拍数を計測した。ロボットによる防除時間は、セット動噴を使用した防除より46%減となった。また、ロボット防除での心拍数は、平均心拍数136bpm、最大心拍数151bpmとなり、動噴散布(平均心拍数159bpm、最大心拍数176bpm)と比較して身体的負担が小さいことが示唆された。来年度は、販売モデルであるXCP200において、現場の農業作業条件に合わせたうえで、作業時間や身体的負荷を調査する必要がある。また、白さび病防除に関して、高温蒸し込みや生物由来資材の活用等も検討していく。

収穫では、品種による電照消灯時期を検討した。品種によって、電照消灯時期は異なるが、盆需要期(8月上旬)に開花を揃えることが可能であったことから、一斉収穫を行うことが可能であることが示唆された。今年度は、3品種のみしか調査できなかったため、次年度は他の県内栽培品種についても調査を行う。また、一斉収穫方法として、チップソーやバリカン等を用い、切り花品質に与える影響を調査していく。

## (6) 8月出荷で高収益化！ブドウの早期収穫技術の開発 (R6～R10)

園芸研究センター ウメ・果樹G 田中裕介

‘シャインマスカット’の無加温ハウス内での被覆方法の違いが収穫期や果実品質に及ぼす影響では、休眠期から農P0フィルム等で被覆処理を実施することで収穫期が8日～15日前進化し、果実品質にも影響はなかった。

果実袋の色の違いが‘シャインマスカット’の収穫期及び果実品質に及ぼす影響では、果実袋の色の違いで果実品質に影響はなかったが、赤色袋、ライトグリーン色で果皮色の進行が早まり、収穫期が前進化することが示唆された。

結果枝の環状剥皮の処理時期の違いが‘シャインマスカット’の果実品質に及ぼす影響では、結果枝の着房位置より基部側の最も近い節間に環状剥皮を実施すると、処理時期に関係なく糖度上昇が遅れ、糖度も低い傾向にあった。

## (7) 甘い！大きい！福井オリジナルイチゴ新品種開発と多収技術確立(H31～R6)

品種開発研究部 園芸育種研究G 中村美香

新品種開発については、これまでに選抜した2系統を場内圃場へ16株×3回復定植し、収量や糖度、品質、生育状況等の各種調査を行った。また、現地3ヶ所にて栽培試験を行った。食味や収量性が慣行品種‘紅ほっぺ’並みであることが確認できた。今後品種登録に向けて協議を進める。

多収技術確立については、これまでに選抜した2系統について、3月から株元へのCO2局所を行い収量や生育に与える影響を調査中である。

## (8) 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立(R5～R8)

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 田野井 真・スマート農業研究G 大塚美鈴

品種開発部 作物研究G 岩岡 悠太郎

### ・緑肥関係

昨年比較した緑肥作物の中から、本県に適するものをヘアリーベッチ、ライ麦を各1品種選定し、令和5年10月に圃場に播種した。ヘアリーベッチは生育もよく窒素32.7kg/10a、カリ37.2kg/10aを吸収し、ライ麦はカリ23.5kg/101a程度を吸収し圃場に返すことができることが確認された。

### ・子実トウモロコシ関係 (経営調査含む)

昨年選定した修了生の一番高かった品種を緑肥跡に2つの施肥体系で栽培した。緑肥はヘアリーベッチとライ麦および緑肥なしの3種類、施肥体系は化成肥料100%、化成肥料：鶏ふん50%：50%の2種類を設けた。今回の栽培試験ではヘアリーベッチ跡化成肥料100%で最も収量が高くなった。ヘアリーベッチなしで化成肥料100%の区と比べ収量比126%であった。また、ライ麦跡化成肥料100%でも110%と収量は向上した。化成肥料100%に比べ化成肥料：鶏ふん50%：50%では、ヘアリーベッチ跡で86%、ライ麦跡で80%、緑肥なしで90%という結果となった。緑肥跡に子実トウモロコシを栽培する場合、生育、収量または化成肥料の軽減を考えるとであればヘアリーベッチが一番適していると思われる。

また本年行った現地試験では、ヘアリーベッチを秋から春に栽培し、基肥窒素を3kg/10a減じて子実トウモロコシを栽培した。収量は坪刈りで775kg/10a、実収で507kg/10aであった。

上記の栽培試験と並行して栽培導入時期を確認するための段付け栽培を行った。4月下旬播種、5月中旬播種、5月下旬5月外陣播種、6月上旬播種の4種類で栽培を行った。収量性は5月中旬播種が最も高く、次いで4月下旬播種、5月下旬。6月上旬と播種が遅くなるほど収量は低下していった。今後これらの結果から現在の水田利用の作型に適した時期を検討する。

現地実証にて、緑肥であるヘアリーベッチと子実トウモロコシの労働時間と経済性を調査した。ヘアリーベッチの労働時間は播種作業からすきこみ作業までで1.1時間/10aとなった。子実トウモロコシの労働時間は、他の生産者に委託した収穫作業を除いて、2.67時間/10aとなった。ヘアリーベッチの生産費を子実トウモロコシの肥料費として計上し、子実トウモロコシの生産費と収支を明らかにした。子実トウモロコシで利益を出すためには、機械導入費や収穫、乾燥調製経費を上回る売上を確保するた

めに、収量向上が必要である。また、後作の麦と大豆の増収効果をあわせた経営評価を行う必要がある。

・大豆関係

現地の大豆栽培後圃場の土壌調査を行い、土壌と収量の関係を調べた。

石灰質資材（以下石灰）の施用量（0、100、200kg/10a）とリン・カリ（以下PK）の増施が収量に与える影響について検証した。

現地圃場の土壌調査において、土壌と収量の関係は判然としなかった。収量への影響は他の要因が存在するものと考えられる。施肥試験では、本試験条件下において、石灰・PK施用による収量・生育への影響は認められなかった。

今後は土壌環境を長期的に観察するとともに作業面でのアプローチを図る必要があると思われる。

### （9）水稻の高温登熟耐性に関する育種素材の育成と新規選抜技術の確立（令和6年度～10年度）

品種開発研究部 水稻育種研究G 茶谷弦輝

自然変異集団および重イオンビーム突然変異集団を栽培し、出穂期、栽培特性および高温登熟性を調査し、重イオンビームの吸収線量と突然変異率、照射した原品種と突然変異率との関係を解析した。自然変異集団から2系統、突然変異集団から1系統、有望な高温登熟性を有するイネを選抜した。高温登熟性の評価に関して、登熟気温を一律にして評価する新規手法を開発し、学会で報告した（論文執筆予定のため非公開）

## Ⅲ 現場移転促進（フォローアップ）を図る開発技術（R6）

### （1）越前スイセンの球根養成における省力化栽培技術の確立

園芸研究センター 野菜・花き研究G 山本浩平

越前スイセンの球根養成における8月上旬における分球抑制技術の検討、肥大に適した追肥量・追肥時期の検討及び栽培の省力化技術としてネット栽培について試験を行った。

8月上旬定植として慣行区、もみ殻10%区、もみ殻20%区を設け、6月掘り取りを行い、球根品質を調査した。8月定植においても、もみ殻混用することで分球を抑制することができ、球根品質も問題なかった。

追肥量は慣行、1.5倍、2倍の3水準、追肥時期は慣行（2月13日）、2月17日、3月12日の3水準を設定した。追肥量の試験は、慣行と2倍量について現地養成圃場（福井市笹谷町）でも試験を行った。現地試験では、追肥量が多くなるほど、球根肥大および分球数の増加傾向が見られるものの、10月定植における追肥時期、追肥量における球根肥大の影響は判然としなかった。

ネット栽培は、園芸研究センターでは網目の違いが生育に及ぼす影響を調査するため、12mmと6mmのネットを使用した。球根品質を比較した結果、網目6mmの方が掘り上げ後の品質が良かった。しかし、網目6mmでは根や泥が収穫時絡まりやすく、土壌条件によっては、網目の大きさを変更する必要がある。

また、生産者にもネット栽培を見てもらうため、越前町と福井市の球根養成圃場にてネット栽培試験を実施した。ネット栽培によって、収穫時間は慣行比約60%減であったが、定植時間が増え、全体の労働時間省力効果は約12%にとどまった。

## IV 予備試験 (R 6)

### (1) コシヒカリの高温耐性栽培技術の開発

品種開発研究部 作物研究G 竹内 早希子

コシヒカリの種籾において、実肥を増施することで発芽やその後の生育に及ぼす影響を調査した。

### (2) 収穫後半でも高品質なイチゴ新品種の育成

品種開発研究部 園芸育種研究G 中村美香

市販の高硬度品種を定植し、一部で予備的に交配を行った。また、他県育成品種の譲渡依頼を行い、今後交配親として使用予定である。

### (3) 福井県産ミディトマトを支える新品種の育成

品種開発研究部 園芸育種研究G 阿部洗己

高温耐性を有するミディトマト新品種育成に向け、既往研究および高温耐性を持つとされるトマト品種のリストアップを行った。また、高温耐性を持つとされる15品種について、令和7年度に交配親としての評価を行うために種子を購入し、育苗・定植を行った。

### (4) 大規模施設園芸ミディトマトにおける超多収・安定生産技術の開発

園芸研究センター スマート園芸研究G 坂本浩 藤田雄大 山形惇平

湛液噴霧耕栽培における、県内の主力品種であるミディトマト ‘華小町’の摘果の有無が、草勢維持と収量に及ぼす影響を検討した。摘果区では、着果確認後に8～9個/果房残した。摘果は果実径が10mm以下で行った。摘果の効果は、10月～12月の茎径が太くなる傾向が見られ、増収傾向がみられた。可販果実の平均糖度には若干の向上が見られ有意差が認められた。

台木の効果は、‘フォルタミーノ’、‘アーノルド’、‘カルディア’の3種に‘華小町’腋芽を接ぎ木した。栽培方式はヤンマー方式で令和7年3月まで栽培した。3種の台木中、‘フォルタミーノ’がもっとも草勢が強かった。スプレーポニック方式で栽培した結果、‘フォルタミーノ’接ぎ木区は乱形果が多発した。

温風暖房機の送風ダクトの、異なる噴出口からの距離における風速を測定した。その結果、噴出口から0cmにおいては子ダクトの設置位置によって風速が変化した。しかし、噴出口から50cm、100cmにおいては、噴出口から遠くなるにしたがって風速が低下した。得られた結果を、次年度の送風ダクトおよび群落蒸散を利用した試験に活用する。

## V 電化協会委託試験(R 6)

### (1) ミディトマト ‘華小町’ 挿し穂の冷蔵貯蔵法の開発

園芸研究センター スマート園芸研究G 坂本浩・藤田雄大

ミディトマト ‘華小町’は栄養繁殖系であるため、育苗には挿し穂を大量に必要とする。採穂用親株の確保と管理には広い栽培スペースが必要となるが、挿し穂の貯蔵が可能となれば、採穂親株の管理スペースの縮小が可能になる。そのため挿し穂貯蔵温度および鮮度保持フィルム包装の効果を試験した。

市販のポリエチレン袋を用いて、5～9℃下で14日の冷蔵貯蔵を行った場合には、茎葉に障害が発生し、ほとんどの挿し穂で挿し芽ができなかった。11℃貯蔵区の挿し芽が供試した試験区の温度では発根が多かったが、約4割の発根率であり、実用性に乏しかった。

ポリエチレン袋での貯蔵は困難であったが、鮮度保持フィルムの「PY9T7」で9℃・14日間貯蔵した穂は約7割発根した。ポ

リエチレン袋で挿し穂貯蔵ができない貯蔵条件下でも、鮮度保持フィルム袋で可能な条件があることがわかった。

葉菜類に向けた鮮度保持フィルムを用いた場合、市販のポリエチレン袋では二酸化炭素濃度は高く、鮮度保持袋では概ね0.5%前後であった。発根穂数は「VY712」、「LY6K9」の11℃貯蔵区が高かった。13℃貯蔵区にお

いても「VY712」は高い発根穂数を示した。「VY712」、「LY6K9」の11℃区で苗の活着率が72、78%と良好な値を示したが、無貯蔵の挿し穂の活着率よりは劣った。

貯蔵挿し穂を挿し芽して育苗した苗の定植後の生育は、「VY712」の11℃区育が優れた。全収量は、9℃貯蔵と11℃貯蔵を比較した場合、11℃区が高い傾向が認められた。全体の糖度は全ての区で7.7度以上と高かった特に「PY9T7」の11℃区が8.4度と高かった。可販果の平均糖度は、7.3～7.6度と差は認められなかった。

## VI その他事業（R6）

### （1）病害虫発生予察事業（国・県）（S25～）

病害虫防除室

#### 1) 水稻病害虫

本年の作況指数は98の「やや不良」、上位等級比率は「ハナエチゼン」が約94%、「コシヒカリ」が約85%であった。「いちほまれ」は、約1,500haで栽培された。水稻栽培における直播面積は約3,215haと前年より約100ha増加した。湛水土壤中播種が約2,800haを占めている。

福井県特別栽培農産物認証制度における水稻栽培面積は、約1,154haで前年より約22ha増加した。

苗立枯病(並)

育苗期間中の温度管理や水管理の不備によるものと思われるムレ苗やカビ類が散見された。細菌性病害ではもみ枯細菌病がやや多い発生であった。

葉いもち(並)

7月1半旬に常発地での発生が見られ、その後7月2半旬に全般発生となり、7月5半旬に最盛期となった。7月中下旬の気温は高く、降水量は少なかったため、進展は少なかった。

穂いもち(早生 少、中晩生 少)

初発期は早生が8月1半旬、中晩生が8月3半旬とともに平年並みであった。葉いもちの発生が少なかったことに加え、7月下旬～8月上旬の気温がかなり高く、降水量は少なくその後も高温少雨で穂いもちの進展に適していなかった。

紋枯病(少)

初発期は平前年並みの7月1半旬であり、7月5半旬には全域で発生し、8月中旬には垂直進展が認められた。前年の発生が多かったため、伝染源は多かったと考えられるが、8月の降水量がかなり少なかったため、発生は少なかった。

ごま葉枯病(多)

河川沿い等の低地力圃場での発生が多かった。高温乾燥が続いたことによる肥切れの影響が大きいと思われる。

イネミズゾウムシ(やや多)

本田侵入初期が5月3半旬と、田植直後から発生が見られ、6月下旬にかけて発生のピークが見られた。越冬量が多かったと思われる、5月中旬の気温が高く、本田侵入に好適であった。

ニカメイチュウ(第1世代 やや多、第2世代 多)

フェロモントラップによる越冬世代成虫の発生最盛期は5月6半旬と平年並みであった。本田の幼虫被害は6月1半旬から見られ、6月3半旬に加害盛期となった。前年の第2世代の発生が多く、越冬にも好適な条件であったため、越冬密度は高かった。6月～7月の気温が高めに推移したため第1世代成虫の発生が早まった。

第1世代成虫の発生最盛期はフェロモントラップ調査で7月3半旬と平年より早く、幼虫による加害初期は7月5半旬、加害盛期は8月2半旬となった。幼虫の発育が進んだことで、被害も拡大した。

#### 斑点米カメムシ類(多)

本田侵入初期は6月5半旬、加害盛期は早生が7月4半旬、中晩生が8月1半旬と平年より早くなった。水田周辺雑草地での生息密度は6月下旬は平年より少なく、7月上旬は平年並みであった。7月中旬の早生出穂期における本田内の発生量は平年より少なかった。7月下旬以降気温が高く、降水量が少なくなり、カメムシの発育に好適となった。主要種はアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシであった。

#### イナゴ類(多)

幼虫発生初期5月3半旬、加害盛期6月5半旬で、平年より早かった。一部の地域で特に多い発生となり、一部9月中旬まで発生が見られた。

その他、イネゾウムシ、イネドロオイムシ、イネハモグリバエ、イネヒメハモグリバエの発生は少なかった。ツマグロヨコバイの発生は並み、セジロウンカの発生は少、ヒメトビウンカの発生はやや少であり、トビイロウンカの発生は確認されなかった。イネアオムシ、イネツトムシ、コブノメイガの発生は少なかった。

### 2) 大麦・大豆・ソバの病害虫

#### ①大麦

出穂期は、平坦部で4月中旬頃、山間部で5月上旬頃と平年より早かった。赤かび病の感染時期である開花期頃および登熟期に連続した降雨はなく、赤かび病は少発生であった。その他の病害虫では、株腐病が中山間地を中心に散見されたが、少発生、雪腐病の発生が中山間の積雪の多い所で散見されたが、少発生であった。

#### ②大豆

栽培品種は、「里のほほえみ」が増加し、「エンレイ」は坂井地区などの一部で栽培されている。葉焼病は7月中旬から発生し、9月中旬に最盛期となったが発生および被害程度の圃場間差が大きかった。フタスジヒメハムシは6月中旬から発生が見られはじめ成熟期まで発生が見られて、一部多発生の地域もあったが、全体としては平年並みであった。ウコンノメイガは全体に少発生であった。ハスモンヨトウのダイズでの発生は局地的に多く、カメムシ類の圃場での確認は少なかった。一部ハダニにより葉の黄化が散見された。

#### ③ソバ

一部の地域で8月下旬にアブラムシが多発した。ハスモンヨトウも多発生であったが大きな被害はなかった。

### 3) 野菜・果樹・花卉の病害虫

#### ①野菜

スイカの炭疽病は、6月中旬頃から発生し始め、6月～7月上旬の多雨の影響で多発生であり、つる枯病も多発生であった。アブラムシ類、ハダニ類は、6月～8月下旬まで発生がみられたが、少発生であった。

トマトの灰色かび病は、半促成栽培で4月4半旬頃から発生し始めたが少発生であった。抑制栽培での発生も少なかった。葉かび病うどんこ病も少発生であった。青枯病は、局中発であった。タバココナジラミ等コナジラミ類、アザミウマ類の発生は少なかった。

キュウリのべと病は、半促成栽培、抑制栽培ともに少発生であった。うどんこ病は、半促成栽培、抑制栽培ともに少発生であった。一部褐斑病や斑点細菌病が見られたが少発生であった。アブラムシ類、ハダニ類は少発生であった。抑制栽培の一部で、コナジラミ類やセンチュウ類が多い所があった。

ネギのさび病は少発生であった。8月中旬以降、軟腐病、褐色腐敗病、白絹病の発生が増加した。一部萎凋病が多発した地域があった。ハモグリバエ類、アザミウマ類の発生は全体に少なかった。シロイチモジヨトウは局多発であった。

アブラナ科野菜では、初夏どりのブロッコリーで一部黒すす病が多発した。秋冬どりではハスモンヨトウ、ハイマダラノ

メイガの発生が多発し、コナガ、アオムシは少なかった。

ハスモンヨトウはフェロモントラップにも多く誘殺され、ハウスのホウレンソウでは11月まで発生が続いた。

ラッキョウの、さび病、ハモグリバエ類、ネダニ類の発生は少なかった。

## ②果樹

ウメの黒星病の果実初発は5月下旬で平年並みであった。薬剤散布が不十分であった箇所に発生がみられた程度であったが、坂井地区の一部では発生が多かった。かいよう病は、平年並みの4月下旬に初発が確認され、平年並みの発生であった。灰色かび病は、開花盛期から終期までが長かったため発生が多かった。病斑のほとんどが停止型で、進展型は少なかった。ウメシロカイガラムシ第1世代の孵化最盛期は4月25日であり、平年より2週間ほど早かったが、平年並みの発生であった。コスカシバは、幼虫による食害は平年より早い4月中旬に確認された。高齢樹や特定の品種で増加傾向にあり、平年よりやや多い発生であった。モンクロシャチホコに発生は平年より少なかった。

ナシの黒星病は、4月から幼果や葉柄に発生が見られ、5月以降増加し、特に豊水、幸水での裂果の発生が目立ち、多発生であった。赤星病は6月上旬に初発が見られたが、発生の増加は見られず少発生であった。アブラムシは6月以降、ハダニは7月以降に多くなった。カメムシ類、シンクイムシ類の被害は少なかった。

カキの炭疽病の発生は7月中旬に見られたが少発生であった。カメムシの吸汁被害果10月以降多発し、クサギカメムシが多く、チャバネアオカメムシも見られた。

ブドウの黒とう病が6月以降より発生し、7月上旬に房にも発病が見られたが、袋かけにより果実被害は少なかった。一部で晩腐病、うどんこ病の発生が見られた。ダニ類、コガネムシ類、アブラムシ類が一部で発生した。

## ③その他

新たに発生が確認された病害虫

イネカメムシ

7月にトマト養液栽培施設においてトマト立枯病の発生を確認した。

10月にはトマトキバガ侵入調査用のフェロモントラップにトマトキバガ成虫が誘殺された。本虫による農作物での発生および被害は確認されていない。

## (2) 病害虫防除所運営事業(国庫) (S26~)

病害虫防除室

病害虫発生予察の精度を高め、効率的な防除を推進するために、40名の病害虫防除員を設置し、いもち病、紋枯病、斑点米カメムシ類の発生状況調査を行った。病害虫発生状況調査を基に、病害虫発生予察情報を発表し、防除指導を行った。また、農薬販売業者について指導、取締りを行った。

## (3) 農薬抵抗性検定事業(国・県) (S52~)

### 1) ナシ黒星病の耐性菌検定(R6)

次世代技術研究部 生産環境研究G 岸本弥恵

県内11圃場から採集したナシ黒星病菌11菌株について、薬剤添加培地上で感受性検定を行った。ストロビーフロアブル、トリフミン水和剤、カナメフロアブルについて調査を行った。

### 2) コナガの薬剤感受性検定(R6)

次世代技術研究部 生産環境研究G 小島孝夫

コナガは抵抗性が発達しやすく、監視を継続していく必要がある。新規の薬剤であるジアミドの感受性の低下が、2014年

頃から鹿児島、茨城、千葉で報告されている。飛来源の一部である中国では、2012年の時点で近年導入されたクロラントラニプロールについては中国北部では抵抗性は発達していないが、南部では抵抗性が増加している。効果的な薬剤による防除体系を構築するためには、ジアミド系を含む各種薬剤の殺虫効果を把握する必要がある。

県内各地で採集調査を実施したが、コナガの発生が少なく、過去（30年前）の発生密度は4頭/株みられたが、本年は1頭以下/株または発生を認めなかった。辛うじて1か所（坂井市鳴鹿産）を飼育・増殖に成功した。葉片浸漬法により、25℃、16L8Dで飼育して3日後、5日後、7日後に生死を判定して死虫率を算出した。感受性系統として累代飼育されているコナガについても同様に試験した。なお、苦悶虫は死虫数として計数した。試験は3反復で行い、対照として水道水、展着剤を処理した区を設けた。

遅効的なクロルフルアズロン以外の薬剤は、高くして速い殺虫効果を示した。全国的に抵抗性が問題となっている系統名ジアミド（一般名クロラントラニプロール、商品名プレバソン）の抵抗性は、発達していない結果となった。

### 3) ダイズ紫斑病の耐性菌検定 (R6)

県内 圃場から採取したR4採集 菌株、R5採集 菌株について、薬剤添加培地上で感受性検定を行った。

### (4) 減農薬防除体系実証事業 (国・県) (R4～R6)

次世代技術研究部 生産環境研究G 岸本弥恵

ネギの条間にリビングマルチのオオムギを播種時期を変えて播種し、ネギハモグリバエの被害軽減が図れるか調査した。収穫時の被害度では、無処理区と被害度の差は無かった。

ネギを赤色ネットで覆うとネギハモグリバエの被害は少なくなり、ネギ圃場周囲を赤色ネットで囲うことでもネギハモグリバエの被害が少なくなった。

### (5) 重要病害虫等侵入警戒調査事業 (国・県) H26～

病害虫防除室

#### 1) コドリング

令和6年5月から10月までの期間、福井市寮町農業試験場内ナシ園近くにフェロモントラップを設置し調査を行ったが、本虫は確認されなかった。

#### 2) トマトキバガ

令和5年6月から11月および令和6年3月に福井市寮町農業試験場内および美浜町の園芸研究センターに、9月からはあわら市の園芸カレッジおよび福井市下市町の各トマトハウス近くにフェロモントラップを設置し、調査を行った。

10月12日に名古屋植物防疫所が福井市場、敦賀港湾に設置したトラップに疑義虫の誘殺が確認され、同定の結果、トマトキバガであると確認された。その後、県内各地に設置したトラップにもトマトキバガの誘殺が確認された。しかしながら、栽培トマト等農作物での発生および被害は確認されていない。

#### 3) 火傷病

令和6年4月から11月までの期間、農業試験場内ナシ圃場において見取り調査を行った結果、調査期間中に火傷病は確認されなかった。

#### 4) スイカ果実汚斑細菌病

令和6年4月から8月までの期間、越前市のスイカ栽培圃場において茎葉および果実の発病調査を行った結果、調査期間中に果実汚斑細菌病は確認されなかった。

## 5) ウメ輪紋ウイルス

令和6年6月3日～11日に、福井市、越前町、美浜町、若狭町、おおい町のウメ生産園地および苗生産園地、母樹園地において目視による葉の病徴の有無を調査した結果、輪紋症状は確認されなかった。また、採取した葉を名古屋植物防疫所がイムノクロマト法等による検定を行った結果、陰性が確認された。

## 6) 水稲各病害

(イネミイラ穂病菌、イネクキセンチュウ、その他日本に産しない各種の検疫有害動物であってイネを害するもの)

令和6年5月から9月までの期間、農業試験場内予察田、坂井市現地圃場において調査を行った結果、各病徴は確認されなかった。

## 7) キウイフルーツかいよう病

福井市寮町試験場内のキウイフルーツで、令和6年8月2日に全樹を対象に葉の症状を調査した。また、同日に調査株の全枝および主幹の幹部からの樹液の漏出および新梢の変色や枯れ込みの有無を目視で調査した結果、葉および枝でのキウイフルーツかいよう症状は確認されなかった。

## (6) 土壤保全対策費（土壤環境基礎調査事業）(S54～)

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 吉川侑沙・西端善丸

土壤機能実態モニタリング調査事業：農地25地点の土壤の断面調査および化学性・物理性の分析、アンケート調査を実施し、土壤診断および土づくり対策の基礎試料の作成を行った。

基準点調査事業：場内水田圃場に化学肥料単用区、無窒素区、有機物施用区、総合改善区を設けていちほまれを栽培し、稲わらの連用が土壤と水稲の生育に及ぼす影響を調査した。また、畑ライシメーターで①：秋冬キャベツ栽培前の緑肥（ヘイオーツ）の効果について（5年目、品種：おきなSP）、②：越冬型緑肥であるライムギ：R007、ペルシアンクローバー：まめ小町について調査・分析を行った。その結果、①：緑肥の収量は4/15、5/2播種でDWで0.4t/10a前後で、播種時期をやや早めたR5と比較してDWが減少した。また、キャベツの収量は4/15緑肥播種区で、4.2/10a、5/2播種区で同3.9t、無緑肥区で同4.0tと、収量に差が出なかった。②：R007は4/16刈り込みでR5より刈り込みを早めたところ、DWで0.7t/10aから0.3t/10aと減収した。CN比は前年の41.0から32.3となった。まめ小町は5/22刈り込みでDW0.6t/10a、CN比17.1だった。

農地土壤炭素貯留等基礎調査事業として県内農地10地点（水田9、畑1）および場内基準点調査水田圃場2地点（化学肥料単用区、有機物施用区）の0～30cmの土壤（作土層、第二層）を採取し、土壤炭素貯留量等を分析するとともに、現地圃場の農地管理実態アンケート調査を実施、まとめ、併せて報告書等を作成して農業環境技術研究所に報告した。

地力調査事業として、農地土壤炭素貯留等基礎調査事業の同地点の土壤の物理性および化学性の分析を行い農業環境技術研究所に報告した。

## (7) 肥料検査登録事業（S51～）

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 吉川侑沙

肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、特殊肥料3点（牛糞堆肥2点、鶏糞堆肥1点）について、収去および成分分析を実施した。

## (8) 奨励品種決定調査事業（S39～）

### 1) 水稲

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

本県に適する水稲品種選定のための調査を実施した。予備調査として、早生で4系統、中生で2系統、中晩生で2系統、晩生で7系統を供試した。加工用米に適性のある「関東293号」、「北陸287号」、「笑みたわわ」は、耐倒伏性、いもち病抵抗性に優

れ、多収であるため、やや有望と評価した。加工用米については、多肥条件での栽培試験を行い、昨年（標肥）に比べて収量の向上を確認できた。成績については、関係機関、関係各課に提出のうえ、奨励品種の改廃、次年度以降の調査計画に役立てる。

## 2) 麦類

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

本県に適する大麦・小麦品種選定のための調査を実施した。予備調査として、稈性六条大麦4系統、小麦6系統、醸造用大麦4系統を供試した。稈性大麦では、多収で硝子粒率が極めて低い「北陸皮78号」を有望と評価した。

小麦では、収量性に優れた「銀河のちから」、「夏黄金」、「ゆめちから」、「東北239号」、タンパク含有量の高い「ゆきちから」を有望と評価した。

醸造用大麦では、多収で大粒な「北陸二条77号」を有望と評価した。

成績については、関係機関、関係各課に提出のうえ、奨励品種の改廃、次年度以降の調査計画に役立てる。

## 3) 大豆

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

本県に適する大豆品種選定のための調査を実施した。予備調査として、7系統を供試した。

収量性に優れた3系統を確認したもの、熟期と品質に懸念点があり、3系統全てを再検討と評価した。

成績については、関係機関、関係各課に提出のうえ、奨励品種の改廃、次年度以降の調査計画に役立てる。

## (9) 原原種・原種ほ設置事業 (S38～)

品種開発研究部 作物研究G 吉川嘉一

水稻・麦類・大豆の原種等を生産し、系統維持のための採種をした。原種等の生産実績は、水稻が11品種で原種等13,544kg、大麦ファイバースノウが原原種等352kg、大麦はねうまもちが原原種等366kg、小麦福井県大3号が原原種等153kg、大豆の里のほほえみが原原種等 kgであった。

## (10) 優良種子生産体制確立 (S38～)

品種開発研究部 作物研究G 吉川嘉一

水稻・麦類・大豆の優良種子生産のため、系統栽培では品種特性を確認しながら選抜を行った。生育期間においては異株や雑草を除去し、収穫後は未熟種子や病害汚染種子等を除去し、健全種子の確保に努めた。また、発芽率を調べ、水稻原種および麦類原種はどの品種も90%以上、大豆は80%以上となり、農産物検査基準および県種子審査基準を満たしていることを確認した。

## (11) 水稻生育指標調査(S45～)

品種開発研究部 作物研究G 竹内早希子

5月2日（連休）移植のハナエチゼン、コシヒカリ、あきさかり、いちほまれおよび5月20日（適期）移植のコシヒカリ、あきさかり、いちほまれについて、生育・収量・品質の本年の気象に対する反応を追跡した。

本年の気象は、4月は当初からかなり気温が高く推移したが苗の伸長には大きな問題はなかった。5月は数日周期で天候が変化し、下旬にかなりの大雨が降った。6月上中旬は降雨がかなり少なく日照多く気温も高くなったが、6月22日頃に梅雨入りして以降、7月31日頃に梅雨明けするまでは降水量多く気温は高かった。それ以降9月下旬まで高温で推移し、降水量は少なくなった。日照時間は6、8、9月に多くなったが、5月、7月は平年並みであった。

草丈は全品種で当初は短めだったが6月以降やや長めとなった。茎数は当初はやや少なく、適期いちほまれ以外は多く推移した。幼穂形成期は連休植えで1～2日早く、適期植えで平年並み～2日遅くなった。出穂期はほぼ平年並みとなったが、成熟期は全品種平年より1～5日程度早まっていた。収量は連休いちほまれを除き平年より低収となった。適期あきさかり、いちほまれ以外は穂数が多く、籾数過多で登熟歩合、千粒重が低くなった。倒伏は全体に多かった。玄米タンパク含量はハナエチゼン、連休コシヒカリはやや高く、それ以外の品種は平年並み～やや低くなった。玄米品質は、ハナエチゼン以外において、高温の影響が著しかった前年より整粒率は向上、未熟粒率は減少と改善傾向であったが、平年よりは悪くなった。

## (12) 主要農作物優良品種育成事業 (県) (R2～)

品種開発研究部 水稻育種研究G 茶谷弦輝

国内外から収集した遺伝資源 246 品種・系統を栽培し、出穂期、草型、玄米品質、穂発芽性等の主要な栽培特性を評価した。また収穫した種子を保存した。

品種開発研究部 水稻育種研究G 巻田恵理奈

ラオスの在来稲品種16品種を供試し、日本の稲品種ではあまり見られない、育種素材として有望な形質の探索を行った。登熟期は晩生～極晩生であり、稈長は日本の稲品種よりも高い傾向にあった。収量は全体的に低い傾向にあった。福井県で栽培した時に、実り切らず、また不稔が多く発生していたためと考えられる。圃場観察では早朝開花性を有する品種を3品種確認した。いもち抵抗性は今回調査したすべてのラオスの稲品種で圃場抵抗性または真性抵抗性が確認された。根数を計測したところ、深根性の高い(深根率が90%以上)品種は3品種確認した。また、達観の簡易的な耐乾性調査で耐乾性が強いとされた品種を7品種選定した。澱粉特性を調査した結果、高温登熟下でも澱粉構造が安定していた品種を2品種確認した。

これらのラオス稲品種が持つ優れた遺伝形質を福井県の水稲に取り入れるため、栽培特性の優れた品種との交配を行い、選抜を進めている。

## (13) 農地土壌の炭素貯留能力を向上させるバイオ炭資材等の開発 (国庫) (R2～6)

### (農林水産研究推進事業委託プロジェクト研究)

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 福島朋行・西端善丸

場内水田および坂井市の水田において水稻を対象にバイオ炭施用試験を行った。バイオ炭を床土に混用して苗を作成した結果、慣行苗と同等の苗が作成でき、苗重量が軽くなり苗運搬の軽労化となった。

圃場へのバイオ炭を連用して投入(1000kg、100kg)した後の状況について、本年度は無施用で生育などを検討した。無投入の慣行と比べて生育に大きな差はなく収量も減少することなく同等と見られた。

サトイモではバイオ炭施用で有意差はなかったが若干生育が向上する傾向があった。また収量についても有意差はないものの少し増加した。過年度の試験と同様の傾向であった。

ダイズに対してもバイオ炭施用試験を行った。開花期に根粒菌数が増加し、その影響で収量も増加した。

ネギに対してもバイオ炭施用試験を行った。土壌病害への影響を調査した結果、褐色腐敗病は低下し、昨年と同様の傾向であった。

## (14) 農業分野での衛星データ利用活用手法の確立 (R4～R6)

次世代技術研究部 スマート農業研究G 山口泰弘

### 1) 米の食味推定

県民衛星「すいせん」より得られる植生指数を使って、いちほまれ生産圃場の玄米タンパク質含有量の推測が可能かについて検討した。タンパク含有量は栽培条件によっても変わることから、現場で最も栽培されている中旬移植に絞って分析を行った。農林総合事務所が調査している37地点の内、衛星画像が得られたのは26地点であった。また、南越前町長沢は圃場内の作土生育が大きく違っていることが原因で、GNDVI値が低くなったこと、坂井市丸岡町舟寄は圃場に雲が半分程度かかっていたことから分析から外した。昨年同様、中山間地では山に近く日照が不足することが原因で生育の割に玄米タンパクが上がる傾向がみられた。一方平坦地では地力による土壌タイプ別にみるとGNDVI値と玄米タンパクには正の相関関係がみられた。

### 2) 麦の収穫時期予測

福井市寮町の圃場で出穂後20日から2～3日おきに10時前後にP4Mで撮影を行った。また衛星画像は5月2日から5月21日にかけて不定期に5回撮影した。これまで3年間の結果から、衛星から得られるNDVI値は0.3～0.7の範囲、大麦水分約40%～70%の範囲であれば、大麦水分が予測可能であることがわかった。実際の大麦刈り取り開始時は水分が30%以下となった時期となるため、40%以下となった日から毎日2.1～3.2%の割合で水分が低下するものとして刈り取り開始日を計算することが可能である。

## 3. 普及指導業務実績

### (1) 農業経営発展支援 (田中美紀代、天谷美都希、萩原駿介、道坂怜生)

#### 1) リーディングファームの育成

リーディングファーム育成のため、経営発展を目指す経営体の資質向上と経営発展に向けた「リーディングファーム育成プロジェクト」を実施し、受講者16経営体の中期経営計画策定を支援した。

##### ①キックオフイベント「未来を描く福井の農業セミナー」

地域農業を牽引する先進的農業経営体等を講師とした経営改善・人材育成の取組に関する研修を通じ、経営発展に向けた意識啓発を図るとともに、プロジェクト受講者の募集を行った。

時期：令和6年7月30日(火) 場所：福井県県民ホール

講演1：「経営発展に向けた成長戦略と規模拡大に伴う人材の確保・育成」

講師：中森農産(株) 代表取締役 中森 剛志 氏

講演2：「未来を拓く農業経営者に求められること」

講師：アグリコネクト(株) 代表取締役 熊本 伊織 氏

参加者：指導・青年農業士、農業法人等の経営体、関係機関等 101名

##### ②農業経営塾

専門家で構成する支援チームによる複数回の集合研修を通じ、16経営体の中期経営計画策定を支援した。

開講式 時期：令和6年10月24日(木) 場所：福井県協ビル 602号室

記念講演講師：(株)イカリファーム 代表取締役 井狩 篤士 氏

第1回 時期：令和6年11月14日(木) 場所：食品加工研究所 研修室

第2回 時期：令和6年11月28日(木) 場所：食品加工研究所 研修室

第3回 時期：令和6年12月12日（木） 場所：食品加工研究所 研修室

発表会 時期：令和7年1月23日（木） 場所：福井県産業情報センター マルチホール

講師：中小企業診断士 津田 均 氏、中小企業診断士 松田 博史 氏、中小企業診断士 出倉 裕 氏、  
農業経営アドバイザー 米山 敏生 氏

専門講義講師（第1回）：福井県立大学経済学部 教授 堀田 学 氏

### ③個別支援

専門家講師の個別訪問・指導（延べ14回実施）によって6経営体の経営計画策定を支援した。

講師：中小企業診断士 津田 均 氏、中小企業診断士 松田 博史 氏、中小企業診断士 出倉 裕 氏

また、受講者のうち希望する2経営体について、農業経営コンサルタントによる個別課題解決に向けた相談会を実施した。

日時：【事前面談】令和7年1月31日（金）、【対面相談】令和7年2月19日（水）、20日（木）

場所：坂井農林総合事務所

講師：アグリコネクト（株） 代表取締役 熊本 伊織 氏、コンサルティングビジネスユニット リーダー 齊藤 奈菜 氏

## 2) 関係組織連携による経営体の発展支援

農業経営支援計画検討会を6月から毎月、計10回開催し、77経営体が計画の認定を受け、中小企業診断士等専門家からのアドバイスを受けた。

## 3) 集落営農救援隊による集落営農組織の経営支援

各地区 JA・県の連携により6地区・8集落が支援対象として選定された。県園芸振興課、JA福井県中央会と連携し、JA・県合同の研修会の開催や各地区を巡回した担当者との意見交換、支援内容を普及交換する検討会を開催した。

### (1) 集落営農への支援にかかる研修会

①日時：令和6年11月29日（金）

場所：JA福井県 鯖江中央支店

講師：JA全農 耕種総合対策部 TAC・営農支援課 課長 早見 隆志 氏、課長代理 佐藤 貴紀 氏

②日時：令和7年3月4日（火）

場所：JA福井県 鯖江中央支店

講師：農林水産政策研究所 総括上席研究官 平林 光幸 氏

また、支援ツールや事例の作成・提供により各地区救援隊の活動をバックアップしたほか、それらを体系的に整理し、「集落営農支援にかかる手引書」としてまとめ、指導者向けに配布した。

## 4) 女性活躍支援

農業分野における女性活躍の状況をPRするため、各事務所の協力のもと、女性活躍事例をリストアップし、現地聞き取り調査を実施した。共同経営者、後継者候補、部門リーダー等、それぞれの立場で活躍する6事例をリーフレットとしてまとめ、就農相談会等において紹介した。

### (2) いちほまれ栽培技術の確立と普及（中村真也）

#### 1) 栽培マニュアルに基づく生産指導

チーム会をとおして、各地区の稲リーダーと情報共有を図り、普及指導員の栽培指導を支援した。昨年の記録的な猛暑を受けて、水田農業レベルアップ委員会にて作成された高温対策に準じて、農研機構のシステム（クロパラソル）を活用した出穂期の早期予測や、早刈りによる早期の外観品質の確認など、例年より細やかな情報提供を行った。また、発信方法についても、新たにLINEを使用した情報発信を試行した。その結果、普及指導員の適切な指導や生産者の適切な管理につながり、いちほまれの1等比率は94.6%と高品質を確保し、令和6年産の食味ランキングにおいては、「特A」評価を獲得した。

## 2) 令和7年度に向けたマニュアルの修正

いちほまれは、生産開始から「いちほまれ日本一おいしい米栽培マニュアル」を整備し、生産指導に活用してきた。毎年少しずつ、現地や農試試験結果を元に修正しされてきたが、抜本的な修正はされていなかった。近年、いちほまれは、JAの集荷体制が整備され、担い手ではない、小・中規模の生産者が取り組む事例が増えてきた。そのような方にとっては、現在のマニュアルでは、分かりにくい表現が多いこと等が考えられたため、抜本的な修正作業を実施した。

チーム会で修正内容を検討し、大きく下記の点を修正した。

- ①エコ栽培米の内容に特化し、特裁部分については、別冊で対応
- ②栽植密度を50～60株/坪、という標記から60株/坪程度に変更
- ③高温対策（高温に強い特徴を活かすために）の追加
- ④栽培暦の追加

新しいマニュアルを元に、現地のいちほまれ研究会において栽培研修会が3月を中心に開催され、新しいマニュアルの内容の普及が図られた。

残された課題として、いちほまれの追肥については、過去、茎数測定において追肥基準が作成されたが、現場で使いやすいとは言えず、現場で使いやすい追肥基準の作成とマニュアルの修正が必要である。また、福井、坂井地区を中心とした直播栽培の低収量対策は従来のからの課題となっている。追肥以外の対策として初期生育の影響等も考察していく必要がある。

## (3) 園芸タウンの推進（松下ひろみ）

### 1) データ駆動型農業の実践体制づくり

ICTを活用したミディトマトの収量・品質の向上を図るため、①農業者主体の取組み支援（農業者自らが考える）、②データ処理（入力・収集・分析）の省力化（リアルタイムで議論）、③農業者間のデータ共有支援（多様な視点で議論）を課題とし、ICT施設園芸チーム会を開催した（6,7,8,11,2月）。

#### 【解決目標】

データに基づき農業者同士で議論し、栽培管理を実施

年内収量（9～12月）の確保（収量4t/10a）

収量の安定化（収量13t/10a）

チーム会において、課題解決のための仮説の検討や検証を行った。また、先進事例を収集し共有するとともに、農業者が先進農業者に学ぶ機会を設けた。

目標とする農業者の行動変容には至らなかったものの、データに基づく判断意識は向上した。4経営体中2経営体が、年内収量4t/10a以上を確保した（作型は促成長期どりであるため、令和6年7月に実績検討を予定）。

### 2) 新品種導入によるミディトマトの産地拡大

ミディトマト新品種の推進体制づくりを行うため、①現地試験を通じた農業試験とは異なる条件下における品種特性の把握、②新品種に係る種苗供給体制や生産振興策の検討を課題とし、新品種ミディトマトチーム会を開催した（4～3月）。

場内試験と併せ県内3ヶ所での現地試験を実施し、チーム会において現地での栽培適応性を検討した。新品種候補系統の生育特性および課題と対応等について、関係機関と共有し意識統一を図った。次年度も継続して現地試験を実施する。種苗供給体制や生産振興策は今後の検討事項である。

## (4) ウメおよびブドウの園芸タウン整備による産地振興（三輪直邦）

### 1) ウメ園芸タウンの整備による産地再生

- ①ウメ産地再生計画の作成

産地再生計画の作成は、ウメの生産販売に関わる JA 担当者、各地区普及指導員等が構成員となった園芸レベルアップ委員会果樹部会（以下、「果樹部会」）において協議を進めた。果樹部会は年 4 回（5/9、9/25、1/21、2/19）開催した。はじめに、産地振興の重要要素である品種構成について、特に多収性品種「福太夫」の位置づけを協議した。「福太夫」は、早期多収性で玉揃いが良く品質が安定しているなどの強みがある一方、果皮が傷みやすくネット収穫に向かない、一次加工の際に皮が破れやすい、果実成熟が一気に進むことに合わせて「紅サシ」と収穫期が重なるため収穫の対応が難しいなどの弱みが指摘された。産地はこれまで「紅サシ」で産地ブランドを築いてきたことから、「福太夫」の認知度は低く、「紅サシ」に変えて「福太夫」を主力品種とするのは、現時点で困難との意見もあった。また、随時、新規就農者や大規模経営の主要な担い手を現地巡回し、課題や今後の産地の在り方等について意見を求めた。こうした活動で得られた意見等を踏まえ、現状や課題を整理し、産地振興計画の素案を作成した。計画素案について果樹部会で協議を繰り返し、年度末に生産基盤、人材育成、技術開発、戦略推進の 4 本柱でまとめた「ウメ産地振興計画」を作成した。

## 2) ブドウ園芸タウンの整備による産地化

### ①ブドウ出荷部会の設立

JA でのブドウ生産部会の設置を目指し、昨年度から、JA 担当者やブドウ生産者と部会の運営方針、組織体制、集荷方法等について協議を続けてきた。5 月 9 日に JA ブドウ出荷部会の設立説明会が開催され、ブドウ専業の新規就農者等に参加を呼び掛けた。部会には、坂井地区の生産者 11 名の入会申し込みがあり、年度内の部会設立を目指した。集荷体制等を検討するため、坂井地区の JA 担当者、生産者等で他県産地を視察した。ブドウ部会設立にあたり、JA の栽培指導力向上のため、5 月から 11 月にかけて、JA 営農指導員を対象としたブドウ栽培技術研修会を月 1 回程度開催した。令和 7 年 3 月、坂井地区に JA ブドウ出荷部会が設立された。

### ②直売所におけるブドウの販促活動

ふくいブドウネットワーク会員に対し、各地区で房づくり等の栽培講習会開催し、高品質果実生産を呼びかけた。のぼり等の販促グッズを作成し、PR 活動の強化を図った。9 月 7、8 日、県内の主要直売所のトレタス（福井・若狭共同）、きららの丘（坂井）、南えちぜん山海里（丹南）において、生産者が店頭に立った試食販売を支援した。

## (5) 畜産経営支援（八木保善）

### 1) 地域内での自給飼料生産拡大に向けた支援

#### ア 技術解決チーム会での検討（3 回）

- ・畜産チーム会で飼料高騰対策として地域内での自給飼料生産するための調査研究活動を農業試験場の研究グループおよび高度営農支援課を中心に現地にて調査することについて各事務所より了承を確認した。
- ・第 3 回畜産チーム会では、今年度の子実トウモロコシ生産の状況について説明、9 月末からの収穫実演を案内し、将来的な生産拡大についての情報提供を実施した。
- ・第 5 回畜産チーム会では、子実トウモロコシ生産に関する栽培の作業性および経済性に関する考察についてチーム内で検討した。来年度以降の生産の課題について幅広い角度から議論した。7 年度はさらに 2 ha 増加して 7 ha 程度に生産拡大する見込みである。

### 2) 酪農・肉牛肥育経営への支援

#### ア 酪農衛生検査巡回指導

- 4～1 月 坂井管内 延べ 6 回
- 4～3 月 奥越管内 延べ 7 回

#### イ 新規就農者に対する経営指導

- 4～2 月 奥越管内で乳牛導入、酪農資金計画作成指導 延べ 3 回

ウ 技術解決チーム（酪農経営改善）による活動

6/7 酪農暑熱対策研修

6/21 乳牛飼養管理技術研修

### 3) 鳥インフルエンザ防疫対応<普及計画に記載無し>

・過去最も早い10月17日に北海道で高病原性鳥インフルエンザが発生し、以降、令和7年3月28日までに国内で51件の発生がみられた。

1月中旬に愛知県においての群発を受け、県内養鶏農家へ緊急の石灰配布を行うこととなり、農業試験場で備蓄していた石灰を配布し、配布後使用した分の追加保管（補充）も行った。

・福井、奥越、丹南管内養鶏農家14戸対象 10/31～1回目配布、1/20～2回目配布

### 4) 今後の方向と課題

#### ア 自給粗飼料生産への支援

・飼料価格高騰を受け、畜産農家の経営安定を図るため、自給粗飼料の品質向上、適正な給与について検討を行い畜産農家の生産性改善をすすめる。

#### イ 若手酪農家への経営支援

・本県の酪農経営は、生乳生産量の減少、体細胞が高い状況にあり、乳量の増加と乳質安定の生産技術向上対策が必要である。

・県内酪農家で世代交代が急速に進む状況で、次世代の農業者に対して経営や飼養管理技術の濃密的な支援が必要である。

そのため新規経営開始や新たな加工に取り組む酪農家へ集中した技術支援を行う。

#### ウ 若狭牛の生産拡大

・若狭牛の枝肉は非常に高品質化しているが、枝肉重量が全国平均に比べ低い。また、近年実用化された制限アミノ酸の飼料添加や繁殖ホルモン剤の活用した雌牛の肉質改善を図るなど若狭牛のさらなる品質向上を行う。

## (6) 調査研究や研修等の活動（田中 美紀代、福田 成）

「次世代へつなぐ、希望あふれるふくいの食・農・環境計画」に基づき、高度営農支援課と新設された農業経営・流通支援課が連携し、普及指導活動や調査研究等に取り組んだ。

### 1) 外部評価検討会の実施

幅広い視点から普及指導活動を客観的に評価し、得られた結果を次の普及指導活動に的確に反映することを目的に外部評価会を実施した。

時期：令和6年12月18日（水）、場所：農業試験場 大会議室

対象課題：「未来につながる米産地の強化」「園芸タウンを核とした産地振興」

外部評価委員：福井県指導農業士会会長 上田輝司氏、福井県農業協同組合中央会農政生活部長小林英範氏、キャリアデザイン総合研究所代表 佐々木史光氏、福井県立大学経済学部教授 堀田学氏、日本農業新聞福井通信部 増永ひとみ氏

### 2) 普及指導計画や調査研究への助言

地域の特徴に応じた農業経営支援部・課の普及指導活動が行われるよう普及指導計画検討会、中間検討会、実績検討会を通し助言に当たった。

調査研究については、県内全調査研究の取りまとめにおけるアドバイスや7部門の実績検討会を開催した。

### 3) 普及指導員の資質向上

普及指導活動で直面する課題解決を図るため、普及指導員の資質向上をねらいとして、各研修会を開催した。

#### ① 普及活動高度化研究大会

時期：令和7年2月28日（金） 場所：農業試験場 大会議室

発表：農業経営支援部・課から6課題

審査員：キャリアデザイン総合研究所代表 佐々木史光氏、福井県立大学経済学部教授 堀田学氏、北陸農政局生産部環境・技術課長 岡本博氏、福井県農業協同組合中央会農政生活部長小林英範氏他

## ② 普及指導員研修会

時期：令和6年5月24日（金） 場所：福井県県民ホール（アオッサ 8階）

講演：「バックキャスト思考による計画策定について（ロードマップ化）」

講師：一般社団法人 食農共創プロデューサーズ 代表理事 長谷川潤一 氏

## ③ 若手農業職員活動研修会

時期：令和7年1月27日（月） 場所：国際交流会館 3階特別会議室

参集者：農林水産部副部長、農業試験場長、園芸振興課長、農業関係職員（1～3年）、園振課、農試

内容：活動成果報告、グループミーティング

## 4) 技術解決チーム会の開催

新しい県農業の基本計画の着実な達成に向け、研究員、普及指導員、行政関係者、関係機関の担当者と11の技術解決チーム会を編成し、課題解決にあたった。

## 5) 全国会議等への出席による情報収集

・第12回農業普及活動高度化全国研究大会、令和6年11月21～22日、場所：東京、内容：全国事例発表

・農業革新支援専門員全国ネットワーク会議、令和7年1月29日、場所：web、内容：スマート農業 など

## 4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

### (1) 高校・大学受け入れ授業

農業試験場では、県内の農業系学科を有する高校と共動し、出前講座や試験場での実習授業等を行うことで、次世代を担う若手農業者の育成に取り組んでいる。

講座や実習、インターンシップの受け入れについては、コロナ対策を徹底しながら実施した。

No	実施日	対象	人数	配属G
1	6月13～17日	高校生	4名	本場各研究G
2	8月21～25日	大学生	1名	本場各研究G
3	9月19～22日	大学生	3名	本場各研究G、園芸研究センター
4	10月25～26日	中学生	2名	本場各研究G

### (2) プレスリリース実績

No	実施日	タイトル	対応部署
	7月30日	売上1億円を超える企業的な農業経営体の育成に向けたキックオフイベントを開催します。	農業経営・流通支援課
	10月17日	リーディングファーム育成プロジェクト開講式を開催します	農業経営・流通支援課
	1月17日	リーディングファーム育成プロジェクト発表会を開催します	農業経営・流通支援課
	3月21日	集落営農支援にかかる手引書を作成しました	農業経営・流通支援課
	5月3日	園芸LABOの丘「ゴールデンウィークイベント」を開催します！	園芸LABO

	7月20日	園芸 LABO の丘 開館5周年記念イベント	園芸 LABO
	10月26日	「園芸 LABO の丘」秋フェスタ2024を開催します	
	11月13日	育種研究者の経験と勘によるノウハウをイネの全ゲノム情報から科学的に解明しました	品種開発研究部
	11月27日	直売所向けキウイフルーツ栽培講習会を開催します	園芸研究センター
	1月30日	研究成果「ドローンを活用した水稻の施肥」を紹介します	次世代技術研究部

### (3) 講演会・出前講座

No	実施日	講座名	会場	講師	
				所属部署	氏名
	7月9日	農業法人化研修会丹南会場第1回「福井県農業経営・就農支援センターの紹介」	武生商工会議所	農業経営・流通支援課	道坂怜生
	11月29日	集落営農への支援にかかる研修会「事例紹介」	JA 福井県鯖江中央支店	農業経営・流通支援課	道坂怜生
	1月9日	福井県立大学創造農学科講義「農業経営の種類について」	福井県立大学創造農学科	農業経営・流通支援課	萩原駿介
	1月29日	丹生農業士会研修会「リーディングファーム育成に向けた取り組みについて」	山いちご	農業経営・流通支援課	萩原駿介
	1月29日	令和6年度日本公庫福井支店農林水産事業お客さま交流会「リーディングファーム育成に向けた取り組みについて」	福井商工会議所ビル	農業経営・流通支援課	田中美紀代
	3月4日	集落営農への支援にかかる研修会「集落営農支援にかかる手引書について」	JA 福井県鯖江中央支店	農業経営・流通支援課	道坂怜生
1	5月22日	デジタル機器を使った稲生育診断研修会「水稻の生育診断アプリ Growth eye の使い方（実演）」	JA 福井県嶺南営農経済センター	品種開発研究部	小林麻子
2	5月28日	ぶどう栽培技術（接木方法等）〔ワインカレッジ〕	農業ビジネスセンター	高度営農支援課	三輪直邦
3	6月21日	令和5年度福井市認定農業者会総会「『いちほまれ』の美味しさの秘密を科学する」	ウェルアオッサ	品種開発研究部	小林麻子
4	7月27日	「雇用確保の観点から見る法人化について」 福井県農業会議 農業法人化研修会	福井県中小企業産業 大学校	経営研究G	小島佳彰
5	8月7日	「雇用確保の観点から見る法人化について」 福井県農業会議 農業法人化研修会	サンドーム福井	経営研究G	小島佳彰
6	9月26日	職業発見講座	大野高校	品種開発研究部	岩岡悠太郎
	10月2日	高校生のための「科学・技術者への招待セミナー」	美方高校	園芸研究センター	清水美櫻

	12月10日	キウイ栽培講習会&試食会	道の駅 南越前山海里	園芸研究センター	田中裕介
	12月19日	キウイ栽培講習会&試食会	JA 福井県小浜支店	園芸研究センター	田中裕介
7	12月25日	高志農業士会研修会「水稻育種研究グループの取り組み」	ホテルフジタ	品種開発研究部	小林麻子
	1月7日	ぶどう栽培技術（接木苗の作り方）〔ワインカレッジ〕	農業ビジネスセンター	高度営農支援課	三輪直邦
8	1月11日	「農業経営の種類について」 福井県立大学生物資源学部創造農学科 食農環境実習演習Ⅰ講義	福井県立大学 あわらキャンパス	経営研究G	小島佳彰
9	1月30日	たんなん稲作研究会「水稻生育診断アプリ『Growth eye』の紹介」	JA 鯖江中央支店	品種開発研究部	渡辺脩斗
10	2月4日	福井県内のカブの現状と特徴、課題〔現場でトーク〕	木田公民館	品種開発研究部	中村美香
11	2月6日	福井県農業士会研修会「異常気象に強い品種育成」	ウェルアオッサ	品種開発研究部	小林麻子
12	2月16日	奥越地区農業担い手研修会「異常気象に強い品種育成」	大野市職業訓練センター	品種開発研究部	小林麻子
13	2月20日	二州地区農業士会・二州百姓一家研修「水稻生育診断アプリ『Growth eye』の活用手法について」	敦賀合同庁舎研修館	品種開発研究部	小林麻子
14	3月26日	「稲作における農福連携取組事例について」 NPO 法人ピアファーム ふくい農福連携ネットワーク研修会 福井の農福連携を考え深める研修会	福井県立大学 あわらキャンパス	経営研究G	小島佳彰

#### (4) 園芸LABOの丘による園芸教室と体験講座

「園芸 LABO の丘の来場者数」

月	月別来場者数		来場者数(累計)	
	令和6年度 (人)	令和5年度 (人)	令和6年度 (人)	令和5年度 (人)
4月	3,472	3,181	3,472	3,181
5月	6,888	6,193	10,360	9,374
6月	3,841	3,687	14,201	13,061
7月	6,128	5,790	20,329	18,851
8月	3,871	3,560	24,200	22,411
9月	3,857	4,057	28,057	26,468
10月	5,942	5,456	33,999	31,924

11月	3,702	4,199	37,701	36,123
12月	2,713	3,013	40,414	39,136
1月	2,402	2,241	42,816	41,377
2月	2,722	4,072	45,538	45,449

「園芸教室」

地域の園芸振興のため、野菜を中心とした栽培技術の基礎を習得する場として、農業者に加え園芸に興味のある地域住民を対象に年間9回の講座を開催した。また、受講者から品質の良い果物を生産する栽培技術を学びたいとの要望に応え、6月から3月にかけて、延べ4回の果樹栽培に関する講座を開催した。講義中は受講者から数多くの質問が出される等、野菜栽培への関心の高さが窺われた。

・野菜を中心とした栽培講座

令和6年4月5日(金)～令和7年2月21日(金) 9回開催 時間9:30～11:30

・果樹特別講座

令和6年6月7日(金)、10月4日(金)、令和7年2月22日(土)・23日(日)、3月15日(日)・22日(日)の4回開催

【場所：いずれも園芸LABOの丘】

(野菜等栽培講座)

No	開講日	講義内容	担 当	対象・参加人数
1	4月5日	開講式 野菜畑の土づくりと春播き野菜・ミニ野菜栽培のポイント	園芸交流課長 宮原講師	一般 41名
2	5月10日	主要果菜類の当面の管理 コンパニオンプランツの植付け 主要果菜類・マメ類の病害虫と防除 主要果菜類の生理障害と防止対策	宮原講師	一般 39名
3	6月7日	春播き(植え)野菜類並びに越冬野菜類の収穫 春播き葉茎菜類・根菜類などの病害虫の特徴と防除の一例 春から初夏に播種、定植できる主要花き類	宮原講師	一般 38名
4	7月5日	夏秋播き(定植)野菜類の栽培ポイント 夏秋播き(定植)野菜類の間引きと追肥 初夏から秋に播種・定植できる主要花き類	宮原講師	一般 38名
5	8月2日	夏秋播き主要野菜類の病害虫と防除 野菜栽培で多い質問とその対策 育ててみたいハーブたち40種	宮原講師	一般 25名
6	9月6日	越冬マメ類の播種(定植) まだ間に合う夏秋播き野菜類の播種 夏秋播き主要野菜類の管理と収穫のポイント	宮原講師	一般 36名
7	10月4日	秋冬野菜類の管理と収穫 越冬野菜類の管理 越冬野菜類の主な病害虫と薬剤防除	宮原講師	一般 34名
8	11月8日	秋冬どり野菜類の収穫のポイントと美味しい食べ方 来年の野菜づくりに備えて	宮原講師	一般 37名
9	2月21日	越冬野菜類&ジャガイモ栽培のポイント 閉講式	宮原講師 LABO職員	一般 25名

(果樹特別講座)

1	6月7日	美味しい果物づくり① -春から収穫までの主な管理-	宮原講師	一般 38名
---	------	---------------------------	------	-----------

2	10月4日	美味しい果物づくり② -果樹類の花芽分化と施肥-	宮原講師	一般 34名
3	2月22,23日	ミニリンゴを育てよう	LABO職員	一般 22名
4	3月15,22日	みかん栽培に挑戦!!	LABO職員	一般 **名

「体験・講座」

園芸に親しむ各種の講座を実施した。

区分	体験名	開催回数 (回)	体験者数 (人)
科学 実験	盆ギクの挿し苗をしよう	1	17
	ハーブ多肉「アロマティカス」を植え替えよう	1	6
	ハッピー親子マリモづくり	1	3
	トルコギキョウのミニ寄せ植え	1	14
	母の日寄せ植え教室	2	36
	おうちインテリア“エアプランツ”を育てよう	2	11
	トマト苗を植えよう	2	14
	宿根草の寄せ植え教室	2	39
	簡単トピアリーづくり	2	13
	夏の花とカラーリーフの寄せ植え教室	1	23
	カラフルセダムの植え付け	2	18
	ペットボトルのハンギングバスケット	1	5
	おうちでLABO 秋の寄せ植え	1	14
	秋の寄せ植え教室	2	27
	お家でハーブ栽培	2	6
	コノフィツムの植えつけ	2	17
	春に向けた寄せ植え教室	1	21
	アロマでアンチエイジング	1	8
	シンボルツリーを植えよう	2	12
	ミカン収穫体験	4	22
	聖夜の多肉アレンジ	1	15
	お正月の寄せ植え教室	2	40
	ひまわりのオイルキャンドル	2	11
	2typeルームフレグランス	1	10
科学 実験	ビオラとハボタンのデコレーション	2	10
	ミニリンゴを育てよう	2	22
	春を彩る寄せ植え教室	1	15
	KidsS&C おいしいトマトのひみつ	2	8
	みかん栽培に挑戦!!	2	
	ふさふさマリモを育てよう	1	
	カブトムシ探検隊	2	52
	エケベリアの植え付け	2	39
	ジャガイモの収穫体験	2	49
	サツマイモの収穫体験	2	53
	トマト苗の植え付け	1	25
	花作業体験	1	13
	ウメの収穫体験	2	57
	アロマティカスの植え替え	2	93

	バラの栽培講座	1	10
	オリジナルアロマスプレーづくり	1	4
	ひまわりのオイルキャンドル	1	3
	ハーブのこねこね石けんづくり	4	132
	多肉植物の寄せ植え	18	43
	お花のプチ寄せ植え	5	16
	トマトの収穫体験	50	951
	<b>科学実験 小計</b>	<b>173</b>	<b>2,125</b>
調理 実習	春の和スイーツづくり	2	13
	まるごとロールキャベツづくり	1	6
	こいのぼりロールづくり	1	3
	ハーブの香り ミートスパゲティづくり	1	9
	手軽でかわいい 花びらキッシュづくり	1	1
	ブルーベリータルト	2	24
	キュートなお子様ドリアランチ	1	8
	伝統野菜のスペシャルバーガーセット	2	17
	シャインマスカットケーキ	2	29
	梨のタルト	2	26
	ゴーストフェイスのかぼちゃパイ	2	21
	鶏のピカタ	2	11
	ほっこり秋の彩りランチ	2	17
	ハリネズミのスイートポテト	2	10
LABOのXmasケーキ	2	18	
Xmasミートローフランチ	1	3	
LABOのフルーツ水ようかん	1	14	
菜花とベーコンのピザ	1	4	
わくわくジャムづくり	1	19	
バレンタインブラウニー	2	29	
LABO特製肉まん	1	16	
ひなまつりオムレット	1		
お花見ちらしずし	1		
いちご大福づくり	1	115	
マスカット大福づくり	1	78	
ハーブのミートスパゲティづくり	12	24	
ピザづくり	1	300	
トマトパンづくり	1	27	
トマトスープづくり	2	27	
調理 実習	アイスクリームづくり	11	78
	トマトピザづくり	2	43
	ジャムづくり	28	6
	ウメシロップづくり	6	260
	オリジナルウメシロップづくり	8	14
	ゆずシロップづくり	1	23
	<b>調理実習 小計</b>	<b>109</b>	<b>1,293</b>
工芸 体験	春爛漫セットづくり	2	12
	母の日フラワーアレンジメント教室	1	12
	セミフレッシュのガーランドづくり	2	13
	ウッドボードアレンジ	2	11
	すいぞくかんハーバリウム	2	6
	北欧風フラワーバスケット	2	17
	ふんわりまあるいスワッグ	1	7

ふわふわパンパスのハーブリース	2	16
ハロウィンフラワーアレンジ	1	6
ちょこっとハロウィン	1	6
冬ツリーボード	2	15
和モダンしめ縄リース	2	19
福を集める熊手アレンジ	2	16
シマエナガのふわもこコットンツリー	2	18
愛をこめたフラワーアレンジ	1	7
ハーバリウム “薔薇物語”	2	6
KidsS&C 自然物アート	1	3
ポタニカルアロマサシェ	2	
千日紅とラフィアのミニリース	1	
アロマサシェづくり	2	28
香りのぷによぷによボトル	1	25
木工工作体験	2	29
フラワーボードづくり	1	15
フラワー缶づくり	2	60
しめ縄リースづくり	1	9
お花のミニバスケットづくり	5	18
miniハーバリウムづくり	6	14
種のマグネットアート	33	340
ジュズダマグッズづくり	33	236
押し花カードづくり	20	126
mini壁掛けボードづくり	30	155
どんぐり人形の壁掛けづくり	2	7
まつぼっくりツリーづくり	6	15
オリジナル缶バッジづくり	7	51
工芸体験 小計	182	1,318
体験・講座 合計	464	4,736

「展示・観察」

園芸LABOの施設や園地の展示・機器を活用した自然観察会等を開催し、園芸についての普及啓発を行った。

内 容	開催回数	体験人数
	(回)	(人)
トマトハウス見学ツアー	118	1,379
自然観察	487	6,542
自然体験	39	568
合 計	644	8,489

(5) YouTube での動画コンテンツや SNS(X(旧 Twitter)、LINE)等での情報発信

園芸LABOの丘に来館しなくても園芸を楽しめる動画をめざし、2021年1月21日にYouTubeで動画配信を開始した。

主に園芸植物の四季折々の様子や栽培管理、昆虫、自然の科学知識を高める動画、園芸LABOで行った栽培講座の動画コンテンツを紹介しており、2月末現在でチャンネル登録者数は4,800名以上、総動画再生回数は160万回以上に達している。

また、SNS(X(旧Twitter)やInstagram、LINE)やホームページを活用し、園芸LABOの体験講座や施設・園地の様子などの情報を積極的に行っている

SNS等	項目	2月末現在
LINE	登録者数 <sup>(※)</sup>	483
	配信数	28
X(旧 Twitter)	フォロワー数 <sup>(※)</sup>	438
	ポスト数	806
	インプレッション数	496,592
	いいね数	7,276
Instagram (令和6年8月15日開始)	フォロワー数 <sup>(※)</sup>	182
	シェア数	382
	インプレッション数	30,466
YouTube	チャンネル登録者数 <sup>(※)</sup>	4,896
	動画投稿本数(ショート動画含む)	19
	〃 開始から <sup>(※)</sup>	903
	動画視聴回数	599,086
	〃 開始から <sup>(※)</sup>	1,617,549
ホームページ	ホームページ更新数	32

(※) :開始時からの累計

## 5. 農業者等の視察対応

- ・2024. 7. 10 JA 能美柿部会 「カキの低樹高栽培技術」 6名
- ・2024. 7. 17 たんなん稲作改善研究会 「高温耐性の品種育成と対策技術」
- ・2024. 7. 26 JA 徳島あなん視察 「福井県農業試験場の水稻育種」
- ・2024. 7. 29 岡山県議会農林水産委員会視察 「福井県農業試験場の水稻育種」
- ・2024. 7. 31 岡保アグリパーク 「水田転換園での果樹栽培技術」 5名
- ・2024. 10. 1 岐阜県故郷会視察対応 「コシヒカリといちほまれ」
- ・2024. 11. 20 JA 愛知東梅部会 「ウメ福太夫の片側一文字・V字トリス仕立て」 15名
- ・2024. 11. 21 秋田県農業を応援する議員連盟視察「米の品種」
- ・2024. 11. 27 射水市担い手連絡協議会 「福井県農業試験場における水稻品種開発の取り組み」
- ・2024. 11. 27 JA 福井県営農指導員ほか 「キウイ栽培講習会」 15名

- ・2024. 11. 28 JA 福井県若狭梅生産協議会 「ウメ福太夫剪定講習会」 20 名
- ・2024. 12. 3 射水市営農組織連絡協議会視察 「福井県農業試験場における水稻品種開発の取り組み」
- ・2025. 1. 22 東近江農業委員会視察対応 「スマート園芸研究 G のトマト栽培方式」 22 名
- ・2025. 1. 24 氷見市農業委員会視察対応 「福井県農業試験場の水稻育種について」 19 名
- ・2025. 3. 28 さばえ花き生産組合視察対応 「小ギクの栽培方法や盆ギクの短茎仕上げについて」 8 名

## 6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

### (1) 論文

・Kobayashi, A., Suganami, M., Yoshida, H., Morinaka, Y., Watanabe, S., Machida, Y., Chaya, G., Nakaoka, F., Sato, N., Miura, K., & Matsuoka, M. (2024). How have breeders adapted rice flowering to the growing region? *Journal of Integrative Plant Biology*, 66, 2736 - 2753.

### (2) 著書

- ・小島孝夫(2024) 秋の田起こしと冬の湛水によるニカメイガの防除法. 農業技術体系「作物編」追録 農山漁村 文化協会
- ・小島孝夫(2025) 特集 イネ・ムギ・ダイズの有機栽培 秋の田起こしと冬の湛水によるニカメイガの防除法. 最新農業技術作物 Vol. 17 農山漁村文化協会 東京. 68-70

### (3) 学会等講演発表

- ・澤崎光希：「白ネギ栽培における栽植密度と灌水処理が生育および収量に及ぼす影響」（園芸学会北陸支部 令和6年12月6日 朱鷺メッセ）
- ・山形惇平・藤田雄大・坂本浩：「中玉トマトの低段密植栽培における噴霧耕栽培装置の噴霧ノズルの間隔の違いが果実糖度および収量に及ぼす影響」（園芸学会北陸支部 令和6年12月6日 朱鷺メッセ）
- ・田中裕介：「キウイフルーツ‘東京ゴールド’における誘引方法の違いが生育や果実品質、管理作業時間に及ぼす影響」（園芸学会北陸支部 令和6年12月6日 朱鷺メッセ）
- ・坂本浩：「福井県を代表する切り花品目‘越前水仙’の技術開発と産地支援の歩み」（園芸学会北陸支部シンポジウム 令和6年12月7日 朱鷺メッセ）
- ・小林麻子：「福井県の水稲育種における品質・食味の改良」（日本水稻品質・食味研究会第16回講演会・シンポジウム 令和6年11月7日 株式会社サタケ広島本社）
- ・小林麻子：「福井県における水稻品種開発とブランド化」（福井大学化学セミナー 令和6年10月4日 福井大学工学部）
- ・小林麻子：「福井県の水稲育種における形質およびゲノムデータの利用」（日本育種学会第146回講演会ワークショップ 令和6年9月15日 広島大学）
- ・小林麻子：「高温登熟耐性のメカニズムと育種の現状」（日本育種学会・日本作物学会北海道談話会例会 令和6年8月30日 北海道農業研究センター）
- ・小林麻子：「さかほまれ」の育成（橋本主任とトーク形式）（全国知事会情報交換会 令和6年7月31日 コートヤードバイマリオット）
- ・小林麻子：「水稻育種現場におけるゲノム情報の利用」（イネ遺伝学・分子生物学ワークショップ 令和6年7月5日 東

京大学)

- ・小林麻子：「いちほまれの高温耐性と食味への影響」（令和6年度坂井地区水田農業ハイグレード推進大会 令和6年6月29日 JA坂井)
- ・小林麻子：「水稻の高温障害とその対策」（福井市認定農業者会総会 令和6年6月27日 アオッサ)
- ・小林麻子：「美味しいご飯の炊き方と品種改良の展望」（福井県米穀販売商業組合研修会 令和6年11月24日 アオッサ)
- ・小林麻子：「福井県の水稲育種における出穂期のデザイン育種」（北陸作物・育種談話会 第61回講演会 令和6年11月16日 新潟大学)
- ・巻田恵理奈：「ラオス産イネにおける耐乾性の評価とその可能性」（日本水稲品質・食味研究会 令和6年11月7日 株式会社サタケ広島本社)
- ・山口泰弘：「大豆初作土壌と連作土壌の違いと大豆品種が生育および根粒着床に及ぼす影響」（北陸作物・育種談話会 第61回講演会 令和6年11月16日)
- ・岩岡悠太郎：「はねうまもち」の収量及びβ-グルカン含有率向上に向けた追肥時期の検討と一括肥料の試作について（北陸作物・育種談話会 第61回講演会 令和6年11月16日)
- ・中岡史裕：「登熟気温を一律にして評価した水稻の高温登熟性」（日本育種学会 第147回講演会 令和7年3月20日)

#### (4) 雑誌

- ・大塚美鈴・小島佳彰：大規模集落営農における有機農業の取り組みと今後の展開 農業経営通信 No. 297 p9

#### (5) 広報

##### 1) 日本農業新聞 アグリトゥモロウ

- ・ドローンを活用した分施肥体系：次世代技術研究部 山口泰弘
- ・土耕キュウリのセンチュウ対策：園研センター 澤崎光希
- ・高品質ミニトマトの養液栽培：園研センター 山形惇平
- ・早期成園化に向けたナシの大苗養成技術：園研センター 田中裕介
- ・タマネギの施肥量と追肥の目安：園研センター 澤崎光希
- ・今年の稲作を振り返って：高度営農支援課 中村真也
- ・皮ごと食べられる赤系ブドウ「福井15106号」 坂川和也

##### 2) 福井県植物防疫協会 ふくい植防だより

- ・新害虫「モモヒメヨコバイ」の発生に注意しましょう：次世代研究部 岸本弥恵
- ・隔離溶液土工栽培によるキュウリのセンチュウ対策：園芸研究センター 澤崎光希
- ・コンパクトで楽々作業！早期多収ウメ「福太夫」片側一文字・V字トレリス仕立て：園芸研究センター 猿橋由恵

#### (6) その他（発行物等）

- ・集落営農の次世代継承に向けて～集落営農支援にかかる手引書～（令和7年3月初版）  
編著・発行：企画・指導部 編集担当：農業経営・流通支援課 道坂怜生

## 7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

### (1) 客員教授の招聘

アドバイザーボード

- ・令和6年7月4日

田中朋之准教授（京都大学）

「高温感受性イネ突然変異体 flo11-2 を用いた白未熟粒発生機構の解析」

- ・令和6年7月17日

吉川 貴徳 特命助教（国立遺伝学研究所）

「コメの貯蔵タンパク質に関する情報交換」

## 8. 一般報告

### (1) 施設 (済・要確認 (園研に合わせた))

① 本場	福井市寮町辺操 52-21	
	本場本館 (鉄筋 3 階建)	2,524.52 m <sup>2</sup>
	作業室その他 64 棟 (農業研修館、近代化センター含む)	8,830.59 m <sup>2</sup>
	計	11,355.11 m <sup>2</sup>
	宅地	29,949.52 m <sup>2</sup>
	田	137,769.63 m <sup>2</sup>
	畑	64,758.99 m <sup>2</sup>
	原野	353.00 m <sup>2</sup>
	山林その他	61,003.00 m <sup>2</sup>
	計	293,834.14 m <sup>2</sup>
② 園芸研究センター	三方郡美浜町久々子 35-32-1	
	本館 (鉄筋 2 階建)	1,152.91 m <sup>2</sup>
	園芸体験施設「園芸 LABO」 (木造 1 階建)	580.50 m <sup>2</sup>
	収納調査棟その他 16 棟	2,591.69 m <sup>2</sup>
	計	4,325.10 m <sup>2</sup>
	宅地	108.76 m <sup>2</sup>
	田	21,071.50 m <sup>2</sup>
	畑	52,587.60 m <sup>2</sup>
	原野	1,878.80 m <sup>2</sup>
	雑種地	3,637.30 m <sup>2</sup>
	園芸体験施設用地	23,395.57 m <sup>2</sup>
	計	102,679.53 m <sup>2</sup>

### (2) 予算

#### ① 歳入 (令和 6 年度予算額) (要見直し 園研未確認)

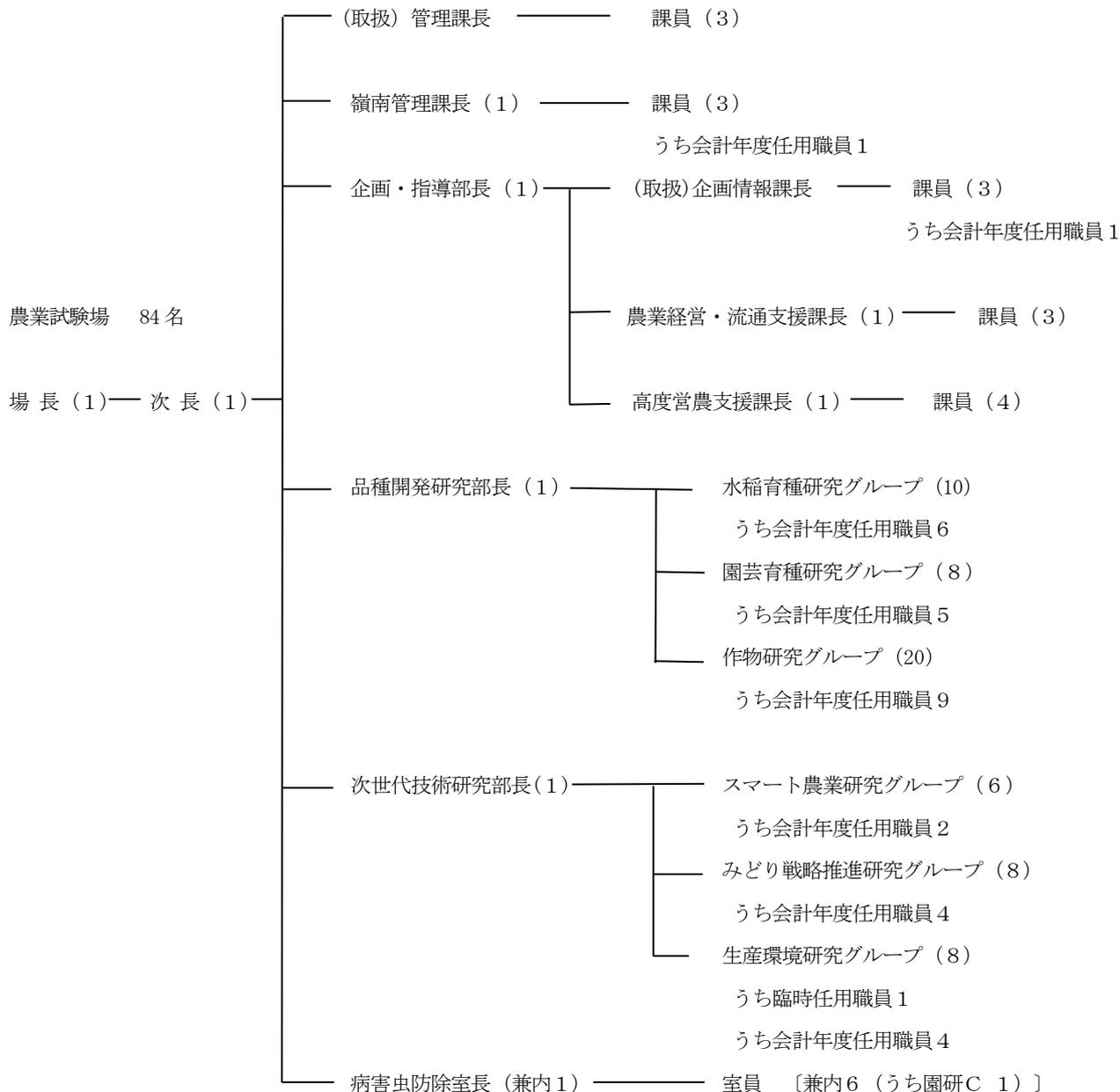
項目	予算額(千円)	摘要
使用料	64	行政財産使用料
財産運用収入	1,026	建物貸付料、特許権等実施料
財産売却収入	9,971	農産物売払代金
雑入	2,417	電気料個人負担金、水道料個人負担金、園芸LABO体験料、その他
計	13,478	

② 歳 出 (令和6年度予算額)

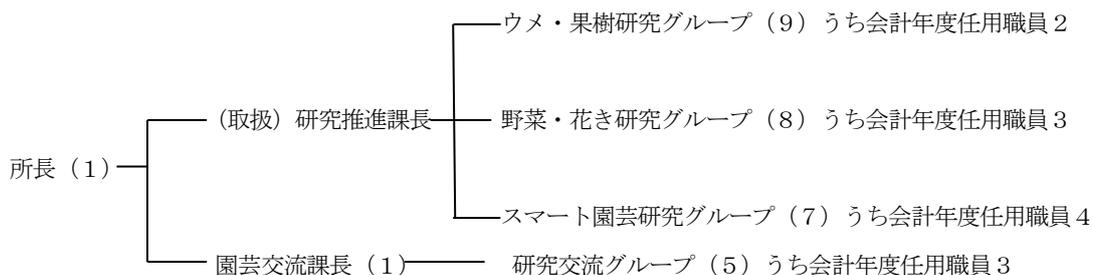
項 目	予算額(千円)	摘 要
本 場 運 営 費	76,995	農業試験場の維持管理、人件費、圃場管理業務委託
試 験 場 運 営 費	57,878	園芸研究センター・圃場・母樹園等の運営維持管理 園芸体験施設の運営維持管理、園芸教室講師謝礼、大規模修繕
戦 略 的 研 究 開 発	3,895	安定良食味な水稲早生品種の開発 病気に強く省力生産できるミディトマト新品种の育成
農 林 水 産 業 の 技 術 開 発	0,000	行政・普及からの要請にもとづく試験研究課題
中 小 企 業 振 興 費	25,703	甘い！大きい！福井オリジナルイチゴ新品种開発と多収技術確立 一年中おいしい‘越のルビー’を生産する低段密植栽培技術の開発 夏季の異常気象に対応できる白ネギ生産技術の確立 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立 中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立 ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立 【新】小ギク生産拡大に向けた省力生産技術の確立 【新】ドローンを活用した生育診断に基づく施肥技術開発 【新】水稲の高温登熟耐性に関する育種素材の育成と新規選抜技術の確立 【新】8月出荷で高収益化！ブドウの早期収穫技術の開発
農 業 総 務 費	5,408	地域課題解決試験研究、農林水産新技術等習得事業、 試験研究課題課・評価システム事業、伝統野菜原種供給事業、 人件費（会計年度任用職員共済費）等
農 業 経 営 対 策 費	922	未来に繋ぐ経営支援事業 米粉試験研究事業
農 作 物 対 策 費	8,512	基本調査事業、原原種原種ほ設置事業、優良種子生産体制確立事業、 肥料検査登録事業、土壌由来温室効果ガス事業、モニタリング調査事業、 基準点調査事業 等
農 業 改 良 普 及 費	4,405	普及指導員研修費、県域普及員活動費、巡回指導費、 農山漁家生活近代化センター費
植 物 防 疫 費	4,703	農薬抵抗性検定事業、病虫害発生予察事業、病虫害防除所運営事業、 減農薬防除体系実証事業 等
グ リ ー ン セ ン タ ー 費	983	農地土壌の炭素貯留能力を向上させるバイオ炭資材等の開発
総 務 管 理 費	17	能登半島地震職員派遣旅費
財 産 管 理 費	55	県有自動車管理費
計	131,598	

(3) 組織と職員数

(令和6. 10. 1 現在)



(附置機関) 園芸研究センター 31名



職員数 115名

(事務職員 16名、技術職員 13名、研究職員 41名、臨時任用職員 1名、会計年度任用職員 44名うち嘱託 3名)

## (4) 人 事

## 職 種 別 人 員 (済・要補)

(令和6.10.1現在)

職 名	行 政 職		研究職	臨時 任用 職員	会計 年度 任用 職員 (嘱託)	会計 年度 任用 職員 (パート)	計	備 考
	事務	技術						
技術職員 場 長			1				1	
事務職員 次 長	1						1	
課 長	1						1	
総括主任	1						1	
主任	2						2	
企画主査	4						4	
主 査	7						7	うち 再任用職員 5
技術職員 部長・所長		1	3				4	
課 長		3					3	
主任		4					4	
主任研究員			10				10	
企画主査		2					2	
研 究 員			10				10	うち 再任用職員 3
主 査		2					2	うち 再任用職員 1
主 事		1	17	1			19	
会計年度任用職員(嘱託)					3		3	園芸交流推進員
会計年度任用職員 (パートタイム)						41	41	
計	16	13	41	1	3	41	115	

(5) 主な備品等（令和6年度、50万円以上）（農試済、園研未入力 要確認 → 園研該当備品なし）

品名	数量	金額(円)	型式
試料粉碎機	1	929,500	サイクロテック CT293
センシングドローン	1	715,000	DJI Mavic 3M